

統語理論入門：佐賀西部方言を初期射程として

古賀 弘毅

©古賀弘毅 KOGA, Hiroki 2008

恩師、*Peter Lasersohn* 先生、*Georgia Green* 先生、*Jerry Morgan* 先生、
James Yoon 先生、そして、古賀香代へ

目次

| | | |
|-------|---------------------------------|----|
| 第 1 章 | 演繹科学としての言語学 | 3 |
| 1.1 | [導入] 足し算の式の文法 | 3 |
| 1.2 | [練習問題] | 11 |
| 1.3 | 科学理論としての言語理論、文法 | 12 |
| 1.4 | 科学理論の、科学理論だけの特徴 (Popper 1968) | 12 |
| 1.5 | 言語理論、佐賀西部方言の文法 # 1 の演繹試験 | 17 |
| 1.6 | 言語理論に関連する現象 | 21 |
| 1.7 | [練習問題] | 24 |
| 第 2 章 | 格形式 | 27 |
| 2.1 | 出来事における意味役割 | 28 |
| 2.2 | 主格 (Nominative) 対格 (Accusative) | 30 |
| 2.3 | 格形式に関する第 2 言語習得者の間違い | 37 |
| 2.4 | 格形式と後置詞の違い | 38 |
| 2.5 | 佐賀西部方言の文法 # 2 | 44 |
| 2.6 | [練習問題] | 48 |
| 第 3 章 | 時制と動詞の形態 | 51 |
| 3.1 | 標準語の動詞の形態分類 | 52 |
| 3.2 | [練習問題] | 61 |
| 3.3 | 佐賀西部方言の動詞と時制の形態 | 63 |
| 3.4 | 佐賀西部方言の文法 # 3 | 67 |
| 参考文献 | | 73 |
| 付録 A | 議論のために：言語（文）にある原理や規則を自分で発見する | 75 |
| A.1 | 第 1 章 4 節の「格形式：主格」の前に | 75 |
| A.2 | 第 2 章 第 2 節の「主格、対格」の前に | 76 |
| A.3 | 第 3 章「動詞と時制の形態」の前に | 78 |

| | | |
|------|---------------------------------|-----|
| 付録 B | 佐賀西部方言の 265 個の動詞の現在形と過去形のリスト | 85 |
| 付録 C | 佐賀西部方言での会話 | 87 |
| C.1 | 有明海での魚獲り | 87 |
| C.2 | ペチャ(めんこ) | 89 |
| 付録 D | 構文解析器 EARLEY における文法の書き方の制限 | 91 |
| 付録 E | 試験 | 93 |
| E.1 | 章テスト No. 1, 出題範囲:「初めに」から第 1 章まで | 94 |
| E.2 | 章テスト No. 2, 出題範囲:「初めに」から第 2 章まで | 97 |
| E.3 | 章テスト No. 3, 出題範囲:「初めに」から第 3 章まで | 101 |

初めに

言語学を論理的に、科学的に勉強したいと思う人は、本書を言語学の入門書や統語論の入門書として使うことができるだろう。日本語教師を目指す人には、日本語の文法について深く考える力を養い、第2言語学習者の苦勞を感じて、体験するのに役立つであろう。佐賀西部方言の文法は、日本語の文法とかなり類似している。本書は、全体で系を形作っており、体系として読んで、いや、体系として「科学して」、意味のある本である。(この本は、言語学の研究成果を断片的に紹介するものではなく、この目的には本書は適さない)。限られた現象ではあるが、現象の裏づけをして、一步、一步議論しながら文法(理論)をひらめき、作ることに力を注いだ。議論によって理論をひらめき、形作ったり、反証したりすることが、もっとも大切な科学、および、哲学だと考えるからである。そして、それは、私にとっては、こどものときのいろいろ遊びと似ていて、うまく行くようにするための追求して止まない知的な試行錯誤の連続である。私は、若い人に、大工さんが小さい材料からひとつの大きな家を建てるように、ひとつひとつの仮定(定義)から理論を作る力、系統立てて論理する力を訓練し、「修得」してほしいと思う。そして、哲学的な深い思考に支えられた研究者が、日本の若い人からも生まれ、(断片的で制限がある、つぎはぎの多い「知識(?)」の混濁する世にありながらも)簡素で、より一般的な(つまり、より多くの現象を説明しうる)真理を一心に探究して行ってほしいと願う。

著者は、本書を佐賀大学の教養教育科目『ことばの成り立ちと構造(統語理論入門：佐賀西部方言を初期射程として)』の教科書として使っている。以下はこの科目のシラバスである。

シラバス

科目名：ことばの成り立ちと構造(統語理論入門：佐賀西部方言を初期射程として)

目標：この科目の目標は、学生自身が佐賀西部方言の文の文法(統語論)を発見し、記述することである。科学理論(理論言語学も含む)の土台となる Popper 1968 の理論の演繹試験の考えを修得した後、提供される佐賀西部方言のデータを観察し、証拠によって議論しながら、文法を一步一步、作っていく。佐賀西部方言および日本語の基礎概念である1)格形式と、2)時制と動詞の形態とが議題である。人が無意識のうちに意味に応じて文を作って使っている言語を「科学」する科目である。

履修上の注意： 本科目は、課題のかなり多い科目である。章テストが3回、期末テストがある。また、言語学における 'do science' を訓練する授業に出席し、集中して理解しようとしないと、成功裏に履修できないであろう。本科目を履修するのであれば、これらの点を考慮することが必要である。生成言語学のコースの履修や構文解析の基礎的理解があれば本科目の理解は少し楽になるだろう。講義録を授業前や後に理解するまで読んだり、宿題を自分から進んでしたりすることは必須である。

授業計画：

- 第01週目：シラバス、第1章 演繹科学としての言語学 1.1 足し算の式の文法
- 第02週目：1.1 足し算の式の文法（続き）
- 第03週目：1.2 科学理論としての言語理論・文法、 1.3 科学理論の、科学理論だけの性質
- 第04週目：1.4 言語理論（佐賀西部方言の文法#1）の演繹試験、 1.5 言語理論に関連する現象、章テスト#1
- 第05週目：第2章 格形式 2.1 出来事における意味役割、 2.2 主格・対格
- 第06週目：2.2 主格・対格（続き）
- 第07週目：2.3 格形式に関する第2言語習得者の間違い、 2.4. 格形式と前置詞の違い
- 第08週目：2.5. 佐賀西部方言の文法#2
- 第09週目：章テスト#2
- 第10週目：第3章 時制と動詞の形態、 3.1 標準語の動詞の形態分類
- 第11週目：3.1 標準語の動詞の形態分類（続き）、 3.2. 練習：「辞書形から形態種を算出する」
- 第12週目：3.3 佐賀西部方言の動詞と時制の形態
- 第13週目：3.4 佐賀西部方言の文法#3
- 第14週目：章テスト#3
- 第15週目：期末試験

教科書：講義録（本著）

成績評価の方法と基準：章テストと期末テスト（計4つ）：80%、出席と議論：20%。

参考図書：

- 日本語教師トレーニングマニュアル2 『日本語文法整理読本（解説と演習）』、井口厚夫、井口裕子著、パベル・プレス 1994年発行
- 『ここからはじまる日本語文法』 森山卓郎 著、ひつじ書房、2002年発行
- 『佐賀の方言』（上、中、下巻） 志津田藤四郎 著、佐賀新聞社、1998、99、2000年発行
- *The logic of scientific discovery*, 1968, Karl R. Popper, Harper & Row: New York.

第1章

演繹科学としての言語学

1.1 [導入] 足し算の式の文法

たとえば、足し算の式について文法（統語論）があるように、言語の文に文法（統語論）があるという基本的な考えに基づいて、この本では、佐賀西部方言の統語論を展開していく。では、ここで足し算の式を正しく定義する文法を作っていく、この本で繰り返し使われる基本的な考えを少し見てみる。

まず、小学生、中学生、高校生の時に学んだ足し算の式で、数字が0と1しか使えないと仮定すると、どんな式が正しく立てられた式かについてはその判断は、以下のようである。列(1a)や列(1b)は正しく立てられた式である。

- (1) a. $1 + 0$
 b. $1 + 0 + 1 + 0$

式(1b)から類推できるように、ある足し算の式に、さらに、「+1」があるいは「+0」を無限につなげて行くことができる。式(1b)では、まず式「 $1 + 0$ 」に「+1」がつなげられ、次に、その式「 $1 + 0 + 1$ 」に「+0」がつなげられている。一方、列(2a)や(2b)は正しく立てられた式ではない。

- (2) a. $*1 +$
 b. $* + + +$

足し算はふたつの項（引き数）が必要で、列(2a)はそのうちのひとつしかないので、正しく立てられた式ではない。列(2b)では足し算+の項は数字でなければならないが、操作あるいは関係（ここでは+）のふたつが足されているので、正しく立てられた式ではない。列(3a)も列(3b)も、正しい式だが、この談話世界では数字を0と1だけであると仮定したので、そのことから、この談話世界では列(3a)も(3b)も正しい式とは言えない。

- (3) a. $2 + 0$
 b. $10 + 0$

数字 2 も数字 10 もこの談話世界では数字と仮定されていない。もし「10」も「2」も数字と仮定されていたら、これらも正しく立てられた式となっていたであろう。なお、列(3b)では、数字 1 と数字 0 との間に空白がなく、このため数字の列 10 はひとつの単語である。この列と、列(4)とは異なる。列(4)では、数字 1 と数字 0 との間に空白があり、1 も、0 も、ひとつの単語である。

- (4) $1 \ 0 + 0$

この列/ $1 \ 0 + 0$ /は、数字 1 と最初の数字 0 との間に操作あるいは関係がないため正しく立てられていない式である。数字と数字の間に必ず、操作・関係がなければならない。もし列(4)でその間に足し算の操作・関係+があつたら、式は「 $1 + 0 + 0$ 」というようになり、正しく立てられた式となっていたであろう。

では、これらの列を正しく立てられた式と正しく立てられていない式とに分けることのできる式の立て方についての規則、数字と足し算の列についての文法を考えよう。「数字に数字を加えたものが式である」という基本的な考え方で、次のような文法# 1 が考えられるだろう： この文法が受け入れる記号 (initial symbol) を S (文、sentence の S と覚えやすいように思ってもよい) とする (Rule 1)。文字「0」と「1」があつたら、それを N (数字、number の N と覚えやすいように思ってもよい) とする (Rule 3、4)。N (数字) があって、足し算+があつて、N (数字) がある列は、文 (S) である (Rule 2)。

- Rule 1: initial symbol: S
 Rule 2: $S \rightarrow N + N$
 Rule 3: $N \rightarrow 0$
 Rule 4: $N \rightarrow 1$

図 1.1 足し算の式の文法 # 1

ここで、 $S \rightarrow N + N$ において、最初の N と + との間には空白があり、+ と 2 番目の N との間にも空白がある。 $a \rightarrow b$ は、「a と b は記号の列で、b という記号の列があつたら、それを記号 a としなさい」という意味である。(論理学で使われる $a \rightarrow b, \text{ if } a, \text{ then } b$ とは異なった使い方、その意味ではない。注意!)。なお、足し算の式の文法 # 1 は、これらの 4 つの規則だけからなり、これら以外の規則はひとつもないということもこの文法の記述は意味している。

足し算の式の文法 # 1 は、前に出てきた 6 つの列のうち、5 つの列(1a)と、列(2a)から(4)は正しく分析する。たとえば、列(1a) / $1+0$ / は、足し算の式の文法 # 1 によって、図(1.2)のように分析され、正しく立てられた式、文法的に正しい文とみなされる。

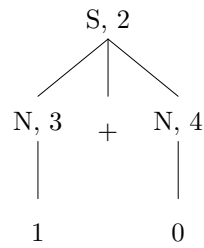


図 1.2 足し算の式の文法 # 1 による '1 + 0' の分析

なお、ここで束ねている節のすぐ横に「, 2」とあるのは、この節が下位の節や記号を束ねるのに、規則の 2 番が使われたということを示している。以下では、どの規則が使われたかを示す番号を省略する。列 (2a) /1+ / は、以下のように、正しく立てられた式、文法的に正しい文とはみなされない。

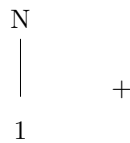


図 1.3 足し算の式の文法 # 1 による '1 +' の分析

列 (4) /1 0+0/ は、以下のように、正しく立てられた式、文法的に正しい文とはみなされない。

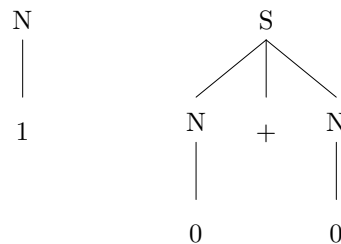


図 1.4 足し算の式の文法 # 1 による '1 0 + 0' の分析

列 (3b) /10+0/ と列 (3a) /2+0/ は、たとえば、 $N \rightarrow 10$ や $N \rightarrow 2$ が、この文法の規則としてないから、これらは、どちらも、正しく立てられた式、文法的に正しい文とは分析されない。ここまでは、足し算の式のどんな列を正しく立てられた式で、どんな列を正しく立てられた式でないかを区別することについて、足し算の式の文法 # 1 の性能はいいように思われる。

それでは、列(1b)は足し算の式の文法#1によってどのように分析されるか考えてみよう。数字、+記号、数字の順に並べばSとする図1.1の規則2の規則そのものではなく、その規則を作った人の意図を汲み取って以下のようにする人がいるかもしれない。

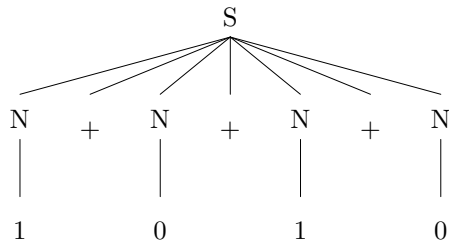


図1.5 足し算の式の文法#1の「含意」による‘1 + 0 + 1 + 0’の分析

このような人は、足し算の式の文法#1による分析ではなく、文法#1中の規則2の $S \rightarrow N + N$ から類推して、 $S \rightarrow N + N + N + N$ も足し算の式の文法#1に含意されていると考えたのであろう。数字に数字を加えると文だから、数字に数字を加え、さらに、数字を加えて行った列も文であるというように考えたのであろう。つまり、図1.5に与えられた分析は、足し算の式の文法#1による分析ではなく、足し算の式の文法#1から含意されるとその人が考えた文法による分析である。というように、これは私たちがここで求めているものではない。

足し算の式の文法#1は、記述された4つの規則だけであって、それら以外にはないと仮定されている。であるから、列(1b)は足し算の式の文法#1によって図1.6中のようになら分析されない。

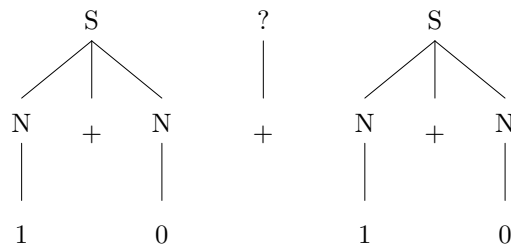


図1.6 足し算の式の文法#1による‘1 + 0 + 1 + 0’の分析

これ以上は分析されない。規則2は $S \rightarrow N + N$ であって、たとえば、 $S \rightarrow S + S$ のような規則ではなく、図1.6上端の $S + S$ をさらに S とすることはしない。このように、私たちは、この列を、正しく立てられた式であると判断するのに、足し算の式の文法#1はそう分析することができない。

式を正しく分析できるような足し算の式の文法を作ったつもりだったが、文法#1はそ

のようなものではなかった。そもそも、科学（実際には、理論）は、決して現象を完全に説明したり、分析したりすることはない。なぜなら、現象は無限であるからだ。この意味で完全な理論はありえない。私たちの理論は、完全に永遠に近づくだけであろう。そこで、正しく分析できない現象に出くわしたら、常にその理論を修正、発展させていかなければならない。つまり、いまやっている足し算の式の場合も、足し算の式の文法 # 1 を修正しなければならない。例えば、先述の足し算の式の文法 # 1 によってではなく足し算の式の文法 # 1 の「含意」によって列 $1 + 0 + 1 + 0$ を分析した図 1.5 中の間違いをヒントにして、文法 # 1 に規則 $S \rightarrow N + N + N + N$ を加えたもの、図 1.7 中の文法 # 1-A を考える人がいるかもしれない。

Rule 1: initial symbol: S
 Rule 2: $S \rightarrow N + N$
 Rule 2': $S \rightarrow N + N + N + N$
 Rule 3: $N \rightarrow 0$
 Rule 4: $N \rightarrow 1$

図 1.7 足し算の式の文法 # 1-A

しかし、足し算の式の文法 # 1-A では、たとえば足し算の式 $1 + 1 + 1$ は文とは分析されない。従って、足し算の式の文法 # 1-A にさらに以下のような Rule 2'', Rule 2''', Rule 2''...' を無限に加えなければならない。

Rule 2'': $S \rightarrow N + N + N$
 Rule 2''': $S \rightarrow N + N + N + N + N$
 Rule 2''...': $S \rightarrow N + N + \dots + N + N + N$

これを可能にするような特別なソフトウェアがあればこれもいいだろう。もっと簡単な文法はないか、あればそのような簡単な文法がよりよいだろう。

また、例えば、足し算の式の文法 # 1 の私たちの判断と異なる分析、図 1.6 をヒントにして、文法 # 1 に規則 $S \rightarrow S + S$ を加えたもの、図 1.8 中の文法 # 1-B を考える人もいるかもしれない。

Rule 1: initial symbol: S
 Rule 2: $S \rightarrow N + N$
 Rule 2': $S \rightarrow S + S$
 Rule 3: $N \rightarrow 0$
 Rule 4: $N \rightarrow 1$

図 1.8 足し算の式の文法 # 1-B

確かにこの規則（規則2'）を加えたことで、足し算の式(1b) $1 + 0 + 1 + 0$ を正しく立てられた式であると正しく分析できるようになった。だが、しかし、3つの数を足した足し算 $1 + 0 + 1$ は正しく立てられた式であるにもかかわらず正しく立てられた式であるとの文法1.8は分析できない。だが、規則2'の代わりに、次の規則を加えると、うまく分析できるようになる。

Rule 2'': $S \rightarrow S + N$

つまり、文法#1、図1.1中の文法に、すぐ上に与えられた式が加わって、ひとつの新しい文法#1-C、図1.9中の文法になった。

Rule 1: initial symbol: S

Rule 2: $S \rightarrow N + N$

Rule 2'': $S \rightarrow S + N$

Rule 3: $N \rightarrow 0$

Rule 4: $N \rightarrow 1$

図1.9 足し算の式の文法#1-C

足し算 $1 + 0 + 1$ は、この新しい文法によって、図1.10のように正しく分析される。

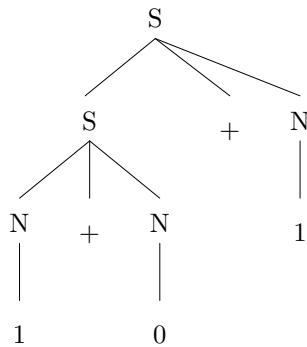


図1.10 足し算の式の文法#1-Cによる'1 + 0 + 1'の分析

このようにして、正しく立てられた式と正しくたてられていない式とを正しく区別する文法#1-Cが作られた。図1.9中の文法1-Cは計5つの規則を含む文法である。(なお、ぜひこの新しい文法#1-Cが足し算の式(1b)を正しく分析するかどうか読者が自分で確認してほしい)。

ここで、文法はひとつしかないというのではない。たとえば、数字が1と0を使って、足し算の式を作る場合、正しく立てられた足し算の式と正しく立てられていない式とを

区別する文法は 1-C 以外にもある。かつ、文法 1-C より、より簡単な式が考えられる。私の経験では、いい文法は、基本となる考えがしっかりしているものである。そして、基本となる考えがしっかりしているからこそ規則も単純であることが多い。この場合だと、「数字と数字を足したら、数字になる。そして、数字を文法は正しい式として受け入れる」と考えたでしょう。この基本となる考えは、図 1.11 中のような文法として作られるであろう。

Rule 1: initial symbol: N

Rule 2: $N \rightarrow N + N$

Rule 3: $N \rightarrow 0$

Rule 4: $N \rightarrow 1$

図 1.11 足し算の式の文法 # 2

この文法の規則の数は 4 である。文法 # 1-C の規則の数は 5 であることと比較すれば単純になっているし、さらに、考え方は、文法 # 1-C の $S \rightarrow N + N$ と $S \rightarrow S + N$ というふたつの規則がこの新しい文法では、 $N \rightarrow N + N$ というひとつの規則に集約され、かなり単純になっていることがわかる。

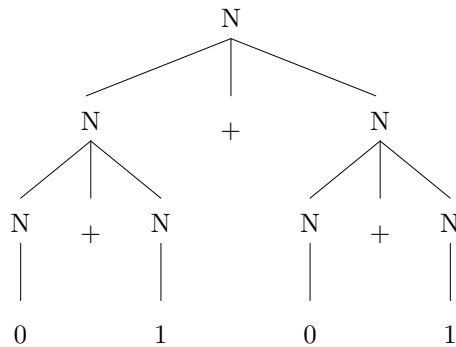


図 1.12 足し算の式の文法 # 2 による '1 + 0 + 1 + 0' の分析

文法 # 2 は、足し算の式 1b を図 1.13 中のようにも分析する。

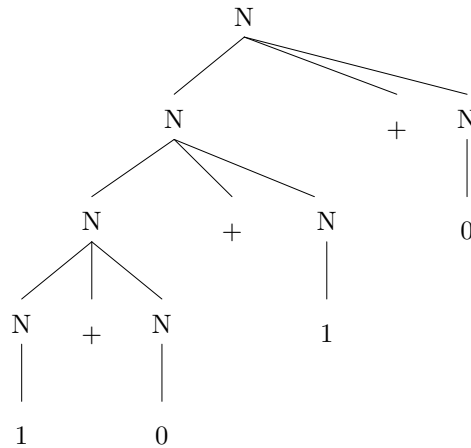


図 1.13 足し算の式の文法 # 2 による '1 + 0 + 1 + 0' のもうひとつの分析

このように分析もひとつであるとは限らない。文法 1-C で、Initial Symbol: S と $S \rightarrow N + N$ と $S \rightarrow S + N$ との 3 つでしている仕事を、文法 2 では、Initial Symbol: N と $N \rightarrow N + N$ とのふたつでできる。

以上、足し算の式についての文法を、記号と数のどのような列が正しい足し算の式かについてより正しく予測するように少しずつ、発展させた。ここで、文法発展の履歴を見よう。文法 1 (5a) は最初の文法である。この文法は、4 つの数の和の式を正しく予測できなかったのが、それが正しく予測できるように、規則 2' を加えて、文法 1-A (5b) に修正した。しかし、このやり方だと、無限の数の数の和の規則 $S \rightarrow N + N + \dots + N$ が必要となり、無理であった。たとえば、3 つの数の和の式についてももうひとつ規則が必要になった。

(5) a. 文法 1

- Rule 1: Initial Symbol: S
- Rule 2: $S \rightarrow N + N$
- Rule 3: $N \rightarrow 0$
- Rule 4: $N \rightarrow 1$

b. 文法 1-A

- 文法 1
- Rule 2': $S \rightarrow N + N + N + N$

c. 文法 1-B

- 文法 1
- Rule 2': $S \rightarrow S + S$

d. 文法 1-C

- 文法 1
- Rule 2': $S \rightarrow S + N$

e. 文法 2

- Rule 1: Initial Symbol: N
- Rule 2: $N \rightarrow N + N$
- Rule 3: $N \rightarrow 0$
- Rule 4: $N \rightarrow 1$

そこで、異なる規則の規則 2' を加えて文法 1-B (5c) に修正した。しかし、この文法では 3 つの数の和の式を正しく予測できなかった。そこで、文法 1-C では、異なる規則、規則 2' $S \rightarrow S + N$ を文法 1 に加えた。これは、いくつの数の和の式でも正しく予測できるようになった。もちろん、文法はひとつに決定されているわけではなく、たとえば、文法 2 でも可能であった。

この節で、足し算の式について文法 (統語論) があり、その文法を発展させていったように、言語の文にも文法 (統語論) があり、それを予測したい現象を拡大させながら、それに応じて文法を発展させていく仕方で、佐賀西部方言の文における文法をこれから展開していく。

1.2 [練習問題]

[問題] 数字 $\{0, 1\}$ の集合に関する演算「割る」の割り算の式を、本文中の足し算の式に関する文法と同様にして、文法 (6) を作った。

- (6) a. Rule 1: Initial Symbol: N
 b. Rule 2: $N \rightarrow N \div N$
 c. Rule 3: $N \rightarrow 0$
 d. Rule 4: $N \rightarrow 1$

この割り算の式の文法が、次の 3 つの式 (7a) ~ (7b) をどう分析するか示しなさい。なお、通常のように、0 で割ることはできないと仮定されているとする。

- (7) a. $0 \div 1$
 b. $0 \div 1 \div 1$
 c. $*1 \div 0$

[解答]:

- (7a) の分析:

- (7b) の分析:

- (7c) の分析:

もしうまく分析できなかったとしたら、どうすれば、上の3つの式を分析できるようになるかを考え、文法(6)(もしあれば)を修正することで、示しなさい。[解答]:*1

1.3 科学理論としての言語理論、文法

言語理論、文法は、科学理論である (Chomsky1965)。

1.4 科学理論の、科学理論だけの特性 (Popper 1968)

科学理論は、また、科学理論だけが、予測を産む。ひとつの科学理論は文、命題を成員とするひとつの集合である。ある科学理論が予測を産むというのは、すぐ以下に図式化し、かつ、明らかにされるように、文、命題からなる予測が、論理的に理論中の文、命題から導かれるということと同値である。文、命題(真か偽であるもの) P_1, P_2, \dots と P_n からなるあるひとつの理論が与えられているとしよう。図 1.14 に図式化されているように、文、命題からなる予測 Q_n が、論理的に理論中の文、命題 P_1, P_2, \dots と P_n から導かれる、つまり、 $(P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n) \rightarrow Q_n$ は、 $P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n$ が真であれば、 Q_n は必ず真であるという意味である。

*1 以下のような文法を考えた人もいるかもしれない。確かに、「 $1 \div 0 \div 1 \div 1$ 」は正しい割り算の式ではないと正しく予測する。

- (i) a. Rule 1: Initial Symbol: N
 b. Rule 2: $N \rightarrow N \div N$
 c. Rule 3: $N' \rightarrow N' \div N$
 d. Rule 4: $N' \rightarrow 0$
 e. Rule 5: $N \rightarrow 1$

しかし、「 $0 \div 1$ 」を数字と予測しない。N' は初期記号でないからである。初期記号がひとつである限りは、筆者もこの問題は解けないと思っている。読者の方で解答を見つけたら、教えていただきたいと思う。

理論 $[\equiv P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n] \rightarrow$ 予測 Q_n

図 1.14 理論の予測

ここで、論理的に導かれる場合には、たとえば、図 1.14 において、ほかのどんな命題や文も、それが自分の考えで、 $P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n$ から導かれるからといって、条件の前件に入れてはならない。数学をやっている場合は、このことを意識することは難しいことではないが、日常における自分の言動についてもこれを遵守するのは難しい。言語学では、自分の言語の語列について、それが文として適切かどうか、また、もし文であれば、どのような意味を持っているか、文や表現はどのように文脈で使用されるかを科学するので、以上の点に十分、注意してほしい。

例えば、以下のような 4 つの規則からなる「と」条件文の文法があったとしよう。

- 規則 1: 初期記号 (Initial Symbol): 文
- 規則 2: 語列 'taro ga hashiru' は文である。
- 規則 3: 語列 'hanako ga hashitta' は文である。
- 規則 4: X と Y とが両方とも文であれば、語列 'X to, Y' もまた文である。

この文法から 'taro ga hashiru to, hanako ga hashitta' は文であると予測される。なぜなら、/to/の前にある語列は 'taro ga hashiru' で、これは、規則 2 から文であり、そして、/to,/の後の語列は 'hanako ga hashitta' で、これは、規則 3 から文であり、そして、規則 4 から、前者の語列のすぐ後に/to,/をつけ、後者の語列をつなげた語列 'taro ga hashiru to, hanako ga hashitta' も文であるからである。ここで、'taro ga hashiru to, hanako ga hashitta' が文であることが、「と」条件文の文法 (理論) の 4 つの規則 (命題、文) から論理的に導き出されている。まったく同様の理由で、(たとえ、この語列については母語話者が文でないと言おうと)、この文法から、'hanako ga hashitta to, taro ga hashiru' も文であると予測される。この文が母語話者は文であると判断しない事実については、後に説明する。

また、この「と」条件文の文法からは、語列 'taro ga hashiru to, hanako ga hashiru' は文であるとは予測されない、つまり、文ではないと予測される。もしこれが文であると予測されるという人がいたとしたら、その人は、この「と」条件文の文法、4 つの規則からの予測を計算しているのではなく、さらに、次のような規則もこの文法に含意されていると考えすぎているためであり、これは科学理論の予測ではしてはならないことである：語列 'hanako ga hashiru' が文であるなら、'hanako' も 'taro' も名詞なので、'hanako' の代わりに 'taro' を挿入した語列、'taro ga hashiru' も文である。これは、この「と」条件文の文法から「論理的に」導き出されたものではない。科学理論の予測は科学理論から論理的に計算されなければならない。

科学理論は、以下のようにして、演繹的に試験される。図 1.15 に図式化されているように、もし、ある現象 (R_n) を一方として、ある科学理論が産む予測 (Q_n) を他方として、そのふたつの間で矛盾があれば、その理論は、その現象によって、反証されたことになる。

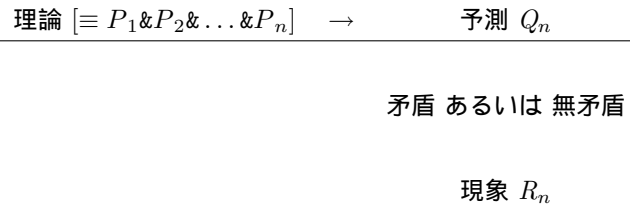


図 1.15 現象と対照される理論の予測

現象は、事実であり、けっして、偽であることはないので、現象と予測との間に矛盾があれば、それは予測が偽であるからである。さらに、予測は理論から論理的に導かれているので、予測が偽であれば、対偶により、理論も偽であることになる。 $(P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n) \rightarrow Q_n$ は、対偶により、 $-Q_n \rightarrow -(P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n)$ と同値である。ここで、予測 Q_n が偽であるので、つまり、 $-Q_n$ が成り立つので、理論 $(P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n)$ は偽である（言い換えれば、反証される）、つまり、 $-(P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n)$ が成り立つ。

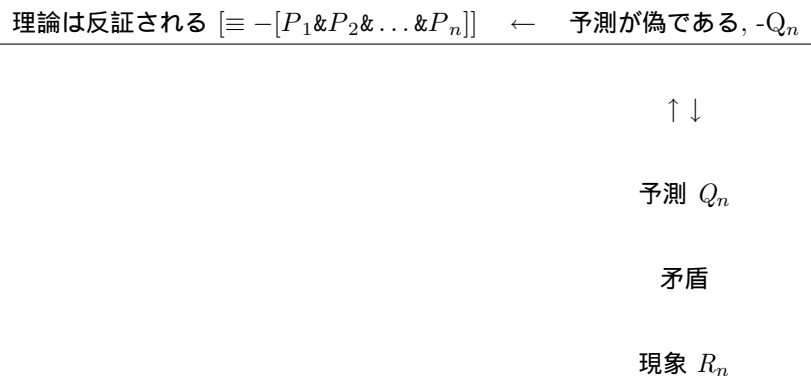


図 1.16 予測と現象との間に矛盾がある場合

さらに、理論が反証されれば、つまり、 $-(P_1 \& P_2 \& \dots \& P_n)$ が成り立つのであれば、 P_1 か、 P_2 か、あるいは、...、 P_n か、どれかひとつは、偽である、つまり、理論中の少なくともひとつの命題（文）は偽であることになる。

前の例を見てみよう。「と」条件文の文法は、語列 ‘taro ga hashiru to, hanako ga hashitta’ によっては反証されない。日本語の母語話者は、この語列が文であると判断す

る。(後で詳しく述べるが、言語学における現象とは、語列に関して母語話者がそれを文法的に的確あるいは適切な文であるかどうか判断するその判断である。) 一方で、理論もこの語列を文であると予測するからである。

だが、「と」条件文の文法は、語列 ‘hanako ga hashitta to, taro ga hashiru’ によって反証される。同文法は、この語列は文であると予測する。一方、日本語母語話者は、この語列を文であると判断しないからである。同文法を提案した科学者は、予測と現象との間の矛盾を認め、この現象によって、同文法は反証されたと認めなければならない。^{*2}

では、ある理論や分析が反証されたら、どうするか。理論や分析が反証されたら、科学者は、努力し、さまざまな新しい命題とその予測と、新しい現象とを対照している間に、うまく行けば、あるひらめきを得るだろう。そのひらめき(ひとつの命題に表されるもの)を原理規則化して、問題の現象とさらにほかの現象を正しく予測できる新しい分析や理論を作り、提案する。第 1.1 節で足し算の式を予測する文法を作ったが、いろいろ試行錯誤して、最後に、ひらめきを得て、初期記号を N とし、 $N \rightarrow N + N$ を規則に含めた文法に発展させたことを思い浮かべて欲しい。もちろん、こうして新しく作られた理論や分析であっても、同様に、演繹試験にさらされる。

先述の「と」条件文の文法を例に取ると、科学者は、接続詞「と」の直前の節は現在形でなければならないというひらめきを得て、以下のような規則を持つ新しい「と」条件文の文法を作り、提案するかもしれない。

- 規則 1: 初期記号 (Initial Symbol): 文
- 規則 2: 語列 ‘taro ga hashiru’ は文であり、かつ、この文の時制は現在である。
- 規則 3: 語列 ‘hanako ga hashitta’ は文であり、かつ、この文の時制は過去である。
- 規則 4: X と Y とが両方とも文であり、かつ、 X の時制が現在であるならば、語列 ‘ X to, Y ’ もまた文であり、かつ、文全体の時制は、 Y の時制と同じである。

このひらめきを使うには、すべての文の時制がわかっていなければ、いけないから、規則 4 において全体の時制を特定している。この新しい「と」条件文の文法は、‘hanako ga hashitta to, taro ga hashiru’ を文ではないと正しく予測する。「と」の直前の文、語列 ‘hanako ga hashitta’ は、規則 3 からその時制は過去であり、間違っ、規則 4 を使って、この過去時制の文が「と」の前に来ているからである。新しい「と」条件文の文法は、同

^{*2} 一方としての予測と、他方としての現象の間に、矛盾があるかどうか(整合性があるかどうか)は、最終的には科学者の主観的な判断による。科学者は、自分の理論や分析に固執して、自分の理論・分析は完全であり、自分の理論・分析を反証したと言う現象は、自分の理論・分析の射程に含まれないものであると主張することができるからだ。しかし、自分の理論・分析が反証されることをためらえば、けっして真理に近づくことはできない。自分の理論が反証されることを素直に、潔く、認め、そして、それを廃棄し、さらにより一般的な理論や分析を探ることが科学者に求められているのである。また、むしろ、自分の過去の理論や分析が反証されることに喜びを見出し、さらに、これまでの自分の考えから飛躍的な進歩の機会がまた到来したと捉えるのが科学者の姿である。

じように、正しく、語列 ‘taro ga hashiru to, hanako ga hashitta’ が文であると予測する。接続詞「と」の直前の語列は、現在時制の文であるからである。また、規則 4 によると、この語列 ‘taro ga hashiru to, hanako ga hashitta’ は文であり、かつ、過去時制の文であると予測される。もちろん、この「と」条件文の文法も演繹試験にさらされる。

1.5 言語理論、佐賀西部方言の文法 # 1 の演繹試験

佐賀西部方言の自動詞を動詞とする簡単な文の文法をまず、考えてみよう。標準語の「子供が寝る」に対応する佐賀西部方言の文は、佐賀西部方言の母語話者（2007年現在の70代の老年層の人）であり、標準語も分かる人に尋ねると、(8)であると言う。

- (8) kodon no nu?
 child Nom sleep[Nonpast]
 ‘A child will sleep.’

標準語の主格形式「が」の代わりに、佐賀西部方言では、「の/no/」が使われ、名詞「子供」の代わりに、「子ども/kodon/」が使われ、動詞の現在形「寝る」の代わりに「ぬっ/nu?/」が使われている。^{*3}「っ」は促音である。専門用語では、声門閉鎖音と呼ばれる。^{*4, *5}

‘A child will sleep’ という意味を伝えるには、佐賀西部方言では、名詞「kodon」、主格の形式「no」、動詞「nu?」が文の要素として必要なことが分かったが、どのような順でこれらの語を言って行ったらいいのだろうか。例えば、標準語の場合もそうだが、(9)とは言えない。

- (9) * nu? no kodon.
 sleep[Nonpast] Nom child

筆者はこれまで日本語をさまざまな国の留学生に教えてきているが、日本語を始めて学ぶオランダ人の学生が‘a child will sleep’の意味を意図しているのに、佐賀西部方言で言ったら、(9)のように間違えたのを鮮明に覚えている。オランダ語の語順が、動詞、主語の順になっており、さらに、動詞－主語の順から拡張して全体の構造を決めるもの（主なる姉妹の枝、専門用語では head daughter という）が前にあるから、主語部分については、主格形式－名詞という順にして、動詞－（主格形式－名詞）の順の(9)と言ったのだろうか。理由は分からないが、(9)のように、彼は、宿題に書いていた。

すべての可能な語順について考えてみると、3つのものの順列だから、最初のものに3通り、次のもののそれぞれに、ひとつずつに選ばれているから、残りの2通り、さらに、最後のもののそれぞれに、すでに2つ選ばれているから、1通りあるから、 $3 \times 2 \times 1 = 6$ とおりにある。以下に、いままでの二つ(8)と(9)を含め、すべて並べた。

^{*3} 佐賀西部方言の主格の格形式「の」は、「ん/n/」と発音されることもある。

^{*4} 「ぬっ」「寝る」が文末であったり、母音が続いたりする場合には、声門閉鎖音（音声記号で表すと、?である）が現れる。子音が続く場合には、「ぬっとです」「寝るのです’/nuttodesu/」のように詰まり、後続する子音の音が出てくる。

^{*5} 佐賀西部方言の単語には、それに対応する標準語の語末が/m/の音であれば、/m/に対して/n/である単語がある。

- (10) a. ?nu? kodon no.
 sleep[Nonpast] child Nom
- b. (= (9))
 *nu? no kodon.
 sleep[Nonpast] Nom child
- c. * kodon nu? no.
 child sleep[Nonpast] Nom
- d. (= (8))
 kodon no nu?.
 child Nom sleep[Nonpast]
 ‘A child will sleep.’
- e. * no kodon nu?.
 Nom child sleep[Nonpast]
- f. * no nu? kodon.
 Nom sleep[Nonpast] child

このように、6つのうち、文法的に適切な文はひとつしかない。「初めに」で触れたが、アステリスク*は、母語話者は、その記号の後に続く語列が文ではないと判断する、あるいは、そう感じることを示している。

それでは、以上の(10a)～(10f)に示されているように、その中の語列のあるものについてはそれを文であると予測し、その他の語列についてはそれを文ではないと正しく予測する文法を作ろう。単語がとても少ないので、少し増やして、動詞として「ぬっ」/nu?/
 「泣く」/naku/、さらに、名詞として、「子ども」/kodon/、「アゲマキ」/agemaki/、主格「の」/no/を使おう。まず、文法が受け入れる語列を文 S(entence) としよう。^{*6} 規則にすると、initial symbol: S となる。「子供が」に対応する佐賀西部方言は、「子どもの」で、これには、名詞(N(oun))があって、すぐ、次に主格の形式(NOM(inative))があれば、それを主格句(NOMP)としなさいという規則、NOMP → N NOM を考えればいいだろう。^{*7} ここで、「子ども」kodon か「アゲマキ」agemaki かがあれば、それを名詞(N(oun))とし、「の」があれば、それを主格の形式(NOM(inative))とする規則、N → agemaki、N → kodon、NOM → no を作る。主格句「子どもの」/kodon no/と動詞「ぬっ」/nu?/がこの順に並んだら、それを文(S)とする規則、S → NOMP V を作ればよい。ここで、「ぬっ」/nu?/か「泣く」naku かがあれば、それを動詞(V(erb))とする

^{*6} アゲマキはマテ貝とか兵隊貝とも呼ばれる。有明海に住んでいた。(著者の父は、有明海に行って、とっけてきて、よくバターで炒めて料理した。それはとてもおいしかった。)

^{*7} 文法中のこのような規則を「書き換え規則」と呼ぶ。

規則、 $V \rightarrow nu?$ 、 $V \rightarrow naku$ を作る。このようにして、佐賀西部方言の文法 # 1 図 1.17 ができあがった。

- Rule 1: initial symbol: S
- Rule 2: $S \rightarrow NOMP V$
- Rule 3: $NOMP \rightarrow N NOM$
- Rule 4: $V \rightarrow naku$
- Rule 5: $V \rightarrow nu?$ %neru 'sleep'
- Rule 6: $NOM \rightarrow no$
- Rule 7: $N \rightarrow agemaki$
- Rule 8: $N \rightarrow kodon$ %kodomo

図 1.17 佐賀西部方言の文法 # 1

「初めに」で規則の意味を学んだように、規則 1 は、主格句 (NOMP) と動詞 (V) とが、この順に並んだら、その列全体を文 (S(entence)) としなさいということを意味しており、並んだ順番も大切である。順番が違って、動詞 (V) が最初に来て、次に、主格句 (NOMP) が現れた場合には、それは文 (S(entence)) とは見なされない。さらに、この規則の場合だと、主格句 (NOMP) と動詞 (V) との間には、他の記号は、何も入ってはいけない、ただ、空白のみが許されている。

では、実際に、佐賀西部方言の文法 # 1、図 1.17 が、語列 (10a) ~ 語列 (10f) や他の語列に関してどのような予測を産むか見てみよう。佐賀西部方言の文法 # 1 は、語列 (11) を、図 (1.18) のように分析して、文法的に正しい佐賀西部方言の文であると予測する。

- (11) kodon no naku.
 child Nom cry[Nonpast]
 'A child will cry.'

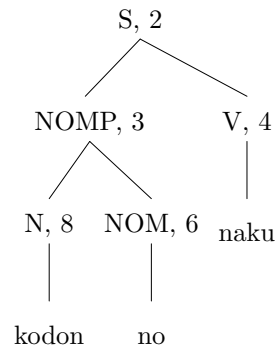


図 1.18 佐賀西部方言の文法 # 1 による 'kodon no naku' の分析

この分析は、/naku/が/nu?/に代わっていることを除けば、語列 (10d) /kodon no nu?/ の分析とまったく同一であることがわかるだろう。なお、ある語列が S と分析されるということは、それが最上節 S から、一下位樹形図、一下位樹形図、分析され、底辺は、文法にある単語があるということと同じである。ひとつの下位樹形図は、たとえば、(S → NOMP V) である。それぞれの節の横にある数字は、その番号の規則がその下位樹形図に使われたことを示している。

佐賀西部方言の文法 # 1、図 1.17 の文法は、語列 (12) を、図 1.19 のように分析して、文ではないと予測する。

(12) *no kodon naku.

Nom child cry[Nonpast]

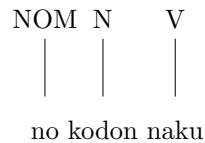


図 1.19 佐賀西部方言の文法 # 1 による語列/no kodon naku/の分析

佐賀西部方言の文法 # 1 には、NOM (主格形式) と N (名詞) がこの順に並んだ場合、それを全体として何かと見なしなさいというような規則はない。また、佐賀西部方言の文法 # 1 には、N (名詞) と V (動詞) がこの順に並んだ場合、それを全体として何かと見なしなさいというような規則もない。このようにして、同文法は、この語列を図 1.19 中の分析以上には分析できない：よって、同文法は、この語列を文であるとは予測しない。

文法がある語列が文であると予測することと、その言語の母語話者がその語列を文であると判断することとは、まったく異なることである。次の節では、このことについて明ら

かにする。

1.6 言語理論に関連する現象

言語学者がある理論がうまく働くかどうかを見るために、その理論による予測と比較するのは、その語列が文であるかどうかに関するその言語の母語話者の判断である。

予測： 文法は、語列が文であるかどうかを予測する。

予測と現象との間の関係： 無矛盾であるか、あるいは、矛盾しているか

現象： その言語の母語話者は、その語列が文であるか、それとも、文ではないか判断する。

図 1.20 文法が理論である場合の予測と現象

母語話者の脳の中にある文法と、科学者が提案する文法とが同一であれば、いかなる語列についても、母語話者の文かどうかの判断と、科学者提案の文法が産む文かどうかの予測とは一致する。この場合は、科学者の提案した文法理論は完全である。しかし、これは、言語学者の夢であり、願いにすぎない。実際は、言語学者は、母語話者の発話する音列とその意味から、母語話者の脳の中にある文法を推理し、完全な文法をつくろうと努力しているが、できない。つまり、言語学者が提案する文法は、決して母語話者の脳の中にある文法と同一になることはない。ということは、言語学者の提案する理論（文法）は、ある語列が文であると予測するにもかかわらず、実際には、その言語の母語話者は、その語列は文ではないと判断することがあるということになる。この逆も、また、あり得る。

ここでは、母語話者の判断が佐賀西部方言の文法 # 1 を反証するように見えながら、実際には反証しないような場合の例を見てみよう。佐賀西部方言の文法 # 1 は、図 1.21 中に分析されているように、語列 (13) (既出の文 (10a) と同様の文) を文ではないと予測する。

(13) ? naku kodon no.
cry[Nonpast] child Nom
'Will cry, a child!'

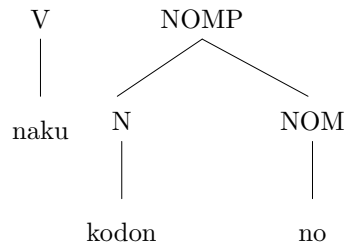


図 1.21 佐賀西部方言 # 1 による ‘naku kodon no’ の分析

佐賀西部方言の文法 # 1 はこの語列をこれ以上には分析できず、文とは分析しない。規則における語の順も意味があり、規則 $S \rightarrow NOMP V$ は、図 1.21 中の列 $V NOMP$ を S とは分析できない。

一方、母語話者は、日常会話でときどき使っていることから、語列 (13) は文であると言うかもしれない。しかし、たとえこの語列を発話したとしても、最初に、「泣く」と言ったすぐ後で、これだけでは聞き手が分からないだろうと後で考えて、誰が泣くかを明らかにしようと、「子どもの」(「子供が」)と付け加えるような場合だけである。この母語話者の言うこと、語列 (13) が文であるということに同意する言語学者もいるし、また、同意しない言語学者もいる。著者も含め、これに反対する言語学者は、以下のように考える。語列 (13) が文であると仮定しよう。そうすると、文 (11) ‘kodon no naku’ が、(14) のように、‘...to-desu’ ‘it is that ...’ の直前に現れることができるように、語列 (13) も ‘...to-desu’ ‘it is that ...’ の直前に現れることができるはずである。^{*8,*9}

- (14) kodon no naku to desu.
 child Nom cry[Nonpast] Comp[*fin*] is[Nonpast]
 ‘It is the case that a child will cry.’

ところが、語列 (13) は、(15) のように、‘...to-desu’ ‘it is that ...’ の直前に現れることができない。

- (15) *naku kodon no to desu.
 cry[Nonpast] child Nom Comp[*fin*] is[Nonpast]
 ‘It is the case that will cry, a child’

^{*8} 佐賀弁の ‘...to-desu’ に対応する標準語は、‘...n(o)-desu’ である。この句型は、話者が、「と」の補語が記述する状態や行為や出来事を、文脈で起こっていることに関連する事実として、提供するときに使う。

^{*9} ‘...とです」の代わりに、条件の接続詞「ぎー」を使っても議論できる。

語列(15)は佐賀西部方言の文法的に正しい文ではない。語列(13)‘naku kodon no’は、‘...to-desu’ ‘it is that ...’の直前に現れることができないから、その語列を文ではないと見る方が、これらの現象をより簡単に説明できる。だから、そうする。言い換えれば、語列(11)‘kodon no naku’の「文性」と語列(13)‘naku kodon no’の「文性」とは異なり、(11)は文とみなし、(13)は、真か偽か言える発話とはみなせても、文とは見なさいことは納得のいくことである。このように、語列(13)が文かどうかに関して母語話者の言うことは、佐賀西部方言の文法#1を反証しそうに見えるが、実際には、反証しない。

次の例は、母語話者の判断が佐賀西部方言の文法#1を反証するようにも、反証しないようにも見えながら、実際には、反証する場合である。佐賀西部方言の文法#1は、語列(16)を図1.22のように分析して、その語列を文ではないと予測する。

(16) naku.

cry[Nonpast]

‘(He/She/It/They) will cry.’



図 1.22 佐賀西部方言の文法#1による語列‘naku’の分析

佐賀西部方言の文法#1は、この語列を、図1.22に分析されている以上には分析できない。この文法には、例えば、Vをさらに文とみなすような規則はない。このように、佐賀西部方言の文法#1は、この語列を文とは分析できない。

一方、母語話者は、実際に語列(16)‘naku’を文として使う。もちろん、誰が泣くかは文脈で明らかで、表出してはいない。この語列が文であることは、語列(13)の場合と同様にして、以下のように、確証を得られる。文(11)が(17)(=(14))のように、‘...to-desu’ ‘it is that ...’の直前に現れることができるように、語列(16)は、(18)のように、‘...to-desu’ ‘it is that ...’の直前に現れることができる。

(17) kodon no naku to desu.

child Nom cry[Nonpast] Comp[*fin*] is[Nonpast]

‘It is the case that a child will cry.’

(18) naku to desu.

cry[Nonpast] Comp[*fin*] is[Nonpast]

‘It is the case that (he/she/it/they) will cry.’

従って、語列(16)を文と見なすが、ずっといろいろな現象を簡単に説明できる。だから、そうする。

以上のようにして、語列(16)は文であるとした方がいい。ところが、そうであるにもかかわらず、佐賀西部方言の文法#1はそう分析しない。佐賀西部方言の文法#1はこのようにして語列(16)によって反証された。言語学者は、佐賀西部方言の文法#1を捨てて、(16)‘naku’や(18)‘naku to desu’のようないわゆる「代名詞削除」の現象を説明する原理を探求し発見して、新しい文法を提案しなければならない。^{*10} この本では、この現象は、議論しない。

1.7 [練習問題]

[問題] 語列(19)に関して佐賀西部方言の文法#1の演繹試験をしなさい。

(19) agemaki no naku.
clam Nom cry[Nonpast]
‘The clam will cry.’

これまで学んだように、文法の演繹試験では、1)問題の現象(語列に関する母語話者の判断)によって文法が反証されるか、反証されないか、2)問題の語列に関して理論がどのような予測を産むか、3)問題の語列に関して、その言語の母語話者は適切な文であるというのか、それとも、適切な文じゃないというのか、あるいは、文自体でもないというのか、が明らかにされなければならない。なお、自分で佐賀西部方言母語話者からこの語列に関する文かどうかの判断を得ること。

佐賀の地域の人に、ある語列が、真か偽かを言えるある特定の意味を持つかどうかを尋ねると、それが文であると母語話者に判断されたかどうかを調べることができる。なぜなら、ある語列から真か偽かを言える意味を得るには、その語列の統語構造(例えば、どれが主語でどれが動詞かなど)が分析され、文であると分析されていなければならないからである。たとえ、語列が文として成り立つ世界が変な世界だとしても、真か偽かの意味を持つと母語話者が言うのであれば、それは母語話者の脳の中でその語列は文であると分析されている。語列が、真か偽かを言えさえもしないとか、あるいは、変な意味さえ持たないと言ったら、それは文ではないと分析されているのである。

[解答]:

- 結論:

^{*10} 「代名詞削除」の現象では、状態や行為という出来事を記述するのに必要な意味役割で、主格形式や目的格形式で示される言葉は表出されなくてもよい。

- 予測:

- 現象:

第2章

格形式

自然言語（コンピュータ言語や命題論理や述語論理の言語などの人工言語ではないもので、日常生活で話したり聞いたりして使っている言語）において、格は、文（や節）の意味を決める重要なひとつの要素である。自然言語のいかなる文も出来事 (event)（詳しく言うと、状態 (state) か、あるいは、行為 (action)）を表すと考えられるが、たとえば、ある行為において行為者、被害者として加わる人やものやことは同じでも、格の違いによって、その人やものやことのうち、何が何にそうするかが、意図とは逆になったりする。たとえば、次のような言語もあるかもしれない。動詞のすぐ後に、代名詞を付帯させて、その代名詞の最初のものが動詞の表す行為の行為者か状態の主題を表す。名詞は、代名詞が付帯した動詞の後に、自由な語順で発声すればよい。とすると、この言語では、語彙が日本語とまったく同じであれば、(20a) では、母は「行為者」になれないが、(20b) では、母は「行為者」である。

(20) a. 食べた-それ-彼女 魚 母.

‘The fish ate Mother.’

b. 食べた-彼女-それ 魚 母.

‘Mother ate the fish.’

この言語では、動詞の後の代名詞が主格や対格がどれかを表している。食べるという行為において行為者、被害者として加わる人やものは、母、魚と、この二つの文、(20a) と (20b) では同じだが、どちらがどちらに対して食べるという行為が行われるかは異なる。たとえ、Mother ate the fish を言いたくても、(20a) を言ったら、格の違いで、the fish ate Mother と言ってしまうことになってしまう。

この本では、佐賀西部方言における主格 (nominative) と対格 (accusative) について議論する。^{*1}

2.1 出来事における意味役割

主格と対格と与格 (位置格) という格形式の説明に、「主題」(theme)、「行為者」(actor)、「被害者 [行為を被り受け、経験するもの]」(undergoer)、[主題かあるいは行為者かあるいは被害者] の「所在位置」(location) は欠かせない。文が表す出来事 (event) において、その出来事に直接、関わるいかなる人やものやことも、これらの4つの意味的な役割 (role) のどれかであるからである。ここでは、主格と対格に関連する「主題」(theme)、「行為者」(actor)、「被害者 [行為を被り受け、経験するもの]」(undergoer) を導入する。

形容詞-繫辞 (例、(21a)) か述語的名詞-繫辞 (例、(21b)) かは、(22) で意味をすこし詳しく示されているように、状態 (state) を表し、かつ、状態を表すのは、形容詞-繫辞か述語的名詞-繫辞かしかない。^{*2,*3}

(21) a. John is tall.
ジョンという名の個体 繫辞 [現在] 背が高い

b. John is a banker.
ジョンという名の個体 繫辞 [現在] ある不特定の 銀行員

(22) cute'(John')

where John' may refer to a set of individuals referred to by *John* in a world, cute' may refer to a set of states referred to by *cute*, and cute'(John') may refer to a set of states of John's being cute.

文 (21a) と (21b) の意味においては、*John* という言葉が表す個体 (人) が、前者で *tall* という表現、後者で *a student* という表現が表す状態 (state) の主題 (theme) である。主題 (theme) の役割に当たる個体 (人や物) が、形容詞・述語的名詞-繫辞が描写する状

^{*1} ほとんどの言語学者の間で同意が得られている格には、主格と対格の他にふたつ、与格 (位置格) と奪格 (所有格) とがある。日本語の標準語では、与格 (位置格) の格形式として「に」があり、奪格 (所有格) の格形式として「の」がある。佐賀西部方言では前者は同じく「に」であり、後者は「が」か「の」である。なお、この本は、与格 (位置格) と奪格 (所有格) の格形式には触れない。

^{*2} *Mary considers John cute* のような場合、繫辞の意味に当たるものが John の表す個体と *cute* の表す状態の間にあると考える。

^{*3} 出来事における状態と行為の意味的な区別は以下のとおりである。状態は、そうではないと後で言われなければ、その出来事は成立したと見なされるのに対して、行為は、そうではないと後で言われなくても、その出来事はすぐに成立しないように見なされる。

態にあるか、あるいは、形容詞・述語的名詞-繫辞が描写する性質を持っているかと言うことである。

繫辞以外の動詞(例、(23a)、(23b)、(23c))は、(24a)と(24b)で意味をすこし詳しく示されているように、行為(action)を表現し、かつ、行為を表すのは、繫辞以外の動詞しかない。

- (23) a. John sleeps.
ジョンという名の個体 寝-現在
- b. John drinks beer.
ジョンという名の個体 飲 m-現在 ビールと言われるもの
- c. John walks this street.
ジョンという名の個体 歩 k-現在 この 通りと言われるもの

- (24) a. sleep'(John')
- where John' may refer to a set of individuals referred to by *John* in a world, sleep' may refer to a set of actions referred to by *sleep*, and sleep'(John') may refer a set of actions of John's sleeping.
- b. drink'(John')(beer')
- where John' may refer to a set of individuals referred to by *John* in a world, sleep' may refer to a set of actions referred to by *sleep*, and sleep'(John') may refer a set of actions of John's sleeping.

文(23a)と(23b)と(23c)の意味においては、*John*という言葉が表す個体(人)が、最初で *sleep* という表現、次で *drink* という表現、最後で *walk* という表現が表す行為(action)の行為者(actor)である。文(23b)と(23c)の意味においては、前者で、*beer*という言葉が表す個体(もの)が *drink* という表現が表す行為(action)の、後者で、*this street*という言葉が表す個体(もの)が *walk* という表現が表す行為(action)の「被害者[行為を被り受け、経験するもの]」(undergoer)である。文(23b)では、飲むという行為の被害者、つまり、飲むという行為を被り受け、経験するものはビールである。文(23c)では、歩くという行為の被害者、つまり、歩くという行為を被り受け、経験するものはこの通りである。

2.2 主格 (Nominative) 対格 (Accusative)

2.2.1 主格 (Nominative)

英語の文 (21a) ~ (21b)、英語の文 (23a) ~ (23c) のそれぞれにおいて、その中の語のうち、「主格 (nominative)」の働きを持っている語に、例えば、*he* (「彼」の意味を持ち主格の働きを持つ語) に置き換えることができる語をそう置き換えてみよう。*he* は名詞だから、名詞以外の語とは置き換えることができない。すると、どの文においても、文 (25c) を除けば、文 (25a) ~ (25d) のように、主格の代名詞 *he* に置き換えられる語は、*John* である。これらの *John* という箇所では、どこも、*he* の代わりに、他の格の代名詞 *him* に代えることも、*his* に代えることもできない。^{*4}

- (25) a. He is tall.
 b. He is a banker.
 c. John is he/him.
 d. He sleeps.
 e. He drinks beer.
 f. He walks this street.

なお、文 (25c) では、文 (22) *John is a banker* において名詞 *a banker* が主格名詞 *he* か、あるいは、対格・与格名詞 *him* に置き換えられることを示している。英語の母語話者によると、対格・与格名詞の方がより使用頻度が高いようである。^{*5} 文 (25c) を考慮しても、英語の文 (21a) ~ (21b) において *John* が表していたのは、状態の主題で、英語の文 (23a) ~ (23c) において *John* が表していたのは行為の行為者であると言える。これから、言語において以下の定理があると考えられる。

- (26) [定理：主格 (nominative) の働き] 主格名詞は、状態の主題 (theme) か、あるいは、行為の行為者 (actor) を表す。^{*6}

では、佐賀西部方言において、文においてどのような形式上の特徴を持つ名詞が、状態の主題か、あるいは、行為の行為者を表しているかを調べてみよう。状態の主題か、ある

^{*4} たとえば、**Him is tall*、**Him is a banker*、**Him sleeps*、**Him drinks beer*、**Him walks this street* は文法的に正しくない。

^{*5} 日本語標準語の述語的名詞-繫辞の文「ジョンが銀行員である」(古典形「ジョンが銀行員にてある」)、「ジョンが銀行員になる」で、この「に」が与格だと考えると、英語の *John is him* で *him* が与格であると考えの方がよさそうである。

^{*6} 実は、格形式の直接、関係する表現、すなわち、格形式の補語は名詞に限らないが、このことはここでの議論と関係がない。文 (48b) や (50b) を見てほしい。

いは、行為の行為者を表している名詞があったら、その名詞に関連している形式上の特徴が、佐賀西部方言の主格と密接に関連するからである。議論の前に結論を先に述べると、状態の主題は、/no/か、あるいは、/ga/かがそのすぐ後ろに付帯している名詞によって表される。文(27a)~(27c)のそれぞれにおいて、形容詞/述語的名詞-繫辞があり、それは状態を表している。

- (27) a. pecha no omoshirokatta.
 menko-game ? is-interesting[past]
 ‘The pecha game was interesting.’
- b. akachan ga genki-katta. [= datta]
 baby ? energetic-be[Perf] [stndrd Jpns]
 ‘The baby was fine/healthy.’
- c. agemaki wa koobutsu-yatta. [= datta]
 clam ? like-be[Perf] [stndrd Jpns]
 ‘Talking about the jackknife clams, they were my favorite.’

文(27a)では、*omoshirokatta* という語が状態を表しているが、その状態の主題は、/no/がそのすぐ後ろに付帯している名詞 *pecha* によって表されている。文(27b)では、状態の主題は、/ga/がそのすぐ後ろに付帯している名詞によって表されている。母語話者によると、微妙な意味の差はあるが、文(27a)中のこの/no/の代わりに、/ga/を使ってもいいし、文(27b)中のこの/ga/の代わりに、/no/を使ってもいいと言う。なお、文(27c)では、状態の主題は、/wa/がその後ろに付帯している名詞によって表されているが、それだけではなく、/wa/がその後ろに付帯している名詞は、文全体の提題(topic)ともなっている。提題詞(topic form)/wa/は、このように、主格形式の/ga/と/no/、そして、後で出てくる対格形式/ba/の働きを含むが、それらとは種類が異なる。^{*7}

次の議論で、行為の行為者(actor)も、状態の主題の場合と同様に、/no/か、あるいは、/ga/かがそのすぐ後ろに付帯している語によって表されるということが分かる。文(28a)~(28c)のそれぞれにおいて、繫辞以外の動詞があり、それは行為を表している。

^{*7} 本文中の例(27c)と同様に、文(i)では、行為の被害者が、/wa/がその後ろに付帯している名詞によって表されているが、それだけではなく、/wa/がその後ろに付帯している名詞は文全体の提題(topic)ともなっている。

- (i) kodon wa yako no damash-ita.
 child ? fox ? deceive-Nonpast
 ‘Talking about children, the fox deceived them.’

このように、/wa/は、主格や対格の働きを含み、そして、提題の働きを持っている。

- (28) a. ie no taoru?. [= taore-ru]
house ? fall-down[Nonpast] [stndrd Jpns]
'The house will fall down.'
- b. yako ga nee kodon ba damash-ita.
fox ? ? child ? deceive-Nonpast
'A fox deceived the child.'
- c. karameshi ba onjisan no kuw-as-u.
rice-only ? uncle ? eat-Honorific-Nonpast
'The uncle ate rice only.'

文(28a)と(28c)では、行為の行為者は、/no/がそのすぐ後ろに付帯している名詞によって表されている。例えば、文(28c)では、*kuwasu* という語が行為を表しているが、その行為の行為者は、/no/がその後ろに付帯している名詞 *onjisan* によって表されている。一方、文(28b)では、行為の行為者は、/ga nee/がそのすぐ後ろに付帯している名詞 *yako* '野狐' によって表されている。だが、/no/でも/ga/でもなく/ga nee/も、/no/と/ga/と同じ種類のものとは考えない。/nee/はそれだけで独立した休止詞と考える方が、文(28b)や(29a)や(29b)のように意味の塊のすぐ後にはどこでも入れてもよくて、それ自体は真偽条件的な意味を持たず、休止しているときに使用されることを説明できるからだ。

- (29) a. yako ga nee kodon ba nee damash-ita.
fox ? ? child ? ? deceive-Nonpast
'A fox deceived the child.'
- b. yako ga nee kodon ba nee damash-ita nee.
fox ? ? child ? ? deceive-Nonpast ?
'A fox deceived the child.'

状態の主題の場合と同様に、母語話者によると、微妙な意味の差はあるが、文(28a)と(28c)中のこの/no/の代わりに、/ga/を使ってもいいし、文(28b)中のこの/ga/の代わりに、/no/を使ってもいいと言う。

以上から、状態の主題(theme)も、行為の行為者(actor)も、どちらも、/no/か、あるいは、/ga/かがそのすぐ後ろに付帯している語によって表されるということが分かった。前章で議論したように、文において、動詞は文末に現れることを含めて、定理(30)

を佐賀西部方言の主格 (Nominative) として提案する。^{*8,*9}

(30) [定理：佐賀西部方言における主格 (nominative)] 佐賀西部方言では、動詞が与えられるとして、その動詞の前に与えられる名詞について、その動詞の主格を、/no/か、あるいは、/ga/かがその名詞のすぐ後ろに付帯することで表される。^{*10}

定理 (30) と意味役割に関する定理 (26) によって、「の」かあるいは「が」が後ろに付帯した名詞は、その後ろに出てくる動詞が表す状態の主題か、あるいは、行為の行為者を表すことになる。本書では、/no/と/ga/を佐賀西部方言の主格の格形式と呼ぶ。(日本語標準語では/ga/が主格の格形式である。) この定理を主格の格形式の観点から捉えなおすと、定理 (31) となる。

(31) [定理：佐賀西部方言における主格 (nominative) の格形式の性質] 佐賀西部方言の格形式、/no/と/ga/は、それぞれ、名詞を補語として取り、その名詞を、後ろに出てくる動詞の主格であると特定する。^{*11}

このようにして、前章の佐賀西部方言の文法 # 1 (図 1.17) で出てきた規則 NOMP → NOM、名詞と主格の形式/no/がこの順で並んで発されれば、それを主格句と見なし、そして、規則 S → NOMP V、主格句と動詞がこの順に発されれば、それを文と見なす規則を体系的にいま説明した。さらに、定理 (31) と意味役割に関する定理 (26) によって、「の」かあるいは「が」を名詞の後ろに付帯すれば、その名詞は、その後ろに出てくる述語的名詞か形容詞-繫辞が表す状態の主題か、あるいは、繫辞以外の動詞の表す行為の行為者を表すとなる。

2.2.2 対格 (Accusative)

英語の文 (21a) ~ (21b) と英語の文 (23a) ~ (23c) のそれぞれにおいて、その中の語のうち、「対格 (accusative)」の働きを持っている語、例えば、*him* (「彼」の意味と、対格と与格の働きを持つ語) に置き換えられるが、与格を表す *to him* と置き換えられない語をそう置き換えてみよう。^{*12} *him* は、実際は、「彼」の意味と、対格と与格の働き

^{*8} 日本語標準語と同様に、佐賀西部方言で動詞が文末になければならないことは、語 *no*, *kodon*, *nu?* の順列で、文法的に正しい並び方は、前章の (10a) ~ (10f) のように、動詞が文末にある列/*kodon no nu?*/のみであったことでも分かる。

^{*9} /no/か/ga/が後ろに付帯した名詞は、実際は、時制のついた動詞といっしょに生起する。このことは、本書では触れない。

^{*10} 脚注*6を参照してほしい。

^{*11} 脚注*6を参照してほしい。

^{*12} 例えば、*John gave him a book* においては、対格名詞と考えられるところは、*a book* のみである。

(i) a. John gave a book **to him**.

b. John gave him to him.

を持つ語であるが、対格の働きのみを持つ名詞は英語にはないのでこれを使うしかない。もちろん、*him* は名詞だから、名詞以外の語とは置き換えることができない。すると、文(32a)～(32e)のように、対格・与格の代名詞 *him* に置き換えられる語は、3つ、(32d)と(32e)と文(25c)、つまり、(32b)である。

- (32) a. John is tall.
 b. (= (25c)) John is him/he.
 c. John sleeps.
 d. John drinks him.
 e. John walks him.

英語の文(32b)においては、*him*、あるいは、*he* と、置き換えることができ、ここは対格だけと関係あるとは言えない。^{*13} 英語の文(32d)と(32e)において、*him* が表しているのは、「行為の被害者 [行為を被り受け、経験するもの]」(undergoer)である。

これから、以下の定理があると考えられる。

- (33) [定理：対格 (accusative) の働き] 対格名詞は、行為の被害者 [行為を被り受け、経験するもの](undergoer)を表す。^{*14}

では、佐賀西部方言において、文においてどのような形式上の特徴を持つ名詞が、行為の被害者 [行為を被り受け、経験するもの](undergoer)を表しているかを調べてみよう。行為の被害者 [行為を被り受け、経験するもの](undergoer)を表している名詞があったら、その名詞に関連している形式上の特徴が、佐賀西部方言の対格と密接に関連するからである。以下の議論で、行為の被害者 [行為を被り受け、経験するもの](undergoer)は、/ba/がそのすぐ後ろに付帯している語によって表されるということが分かる。文(34a)～(34c)のそれぞれにおいて、繫辞以外の動詞があり、それは行為を表している。

- (34) a. yako ga kodon ba damash-ita. (= (28b))
 fox ? child ? deceive-Nonpast
 ‘A fox deceived the child.’
 b. karameshi ba onjisan no kuw-as-u.
 rice-only ? uncle ? eat-Honorific-Nonpast
 ‘The uncle ate rice only.’

なぜなら、*John gave him a book* 中の *him* は (ia) のように *to him* と置き換えられ、与格名詞であると考えられるから。

^{*13} 脚注*5を見てほしい。

^{*14} 脚注*6を参照してほしい。

- c. okomoji don kuw-oi.
pickles ? eat-let's
'Let's eat pickles.'

文(34a)～(34b)では、行為の被害者[行為を被り受け、経験するもの](undergoer)は、/ba/がその後ろに付帯している名詞によって表されている。例えば、文(34b)では、*kuwasu* という語が表す行為を被り受け、経験するもの (undergoer) は、/ba/がその後ろに付帯している名詞 *karameshi* によって表されている。なお、(34a)では、「が」の付帯した名詞(「*yako*」)が、「ば」の付帯した名詞(「*kodon*」)の前にあり、一方、(34b)では、「ば」の付帯した名詞(「空飯」)が、「が」の付帯した名詞(「おんじさん(叔父さん)」)の前にある。これから、これら「が」の付帯した名詞と「ば」の付帯した名詞は、動詞の前にある限りは問題なく、その語順はその節の真偽条件的な意味になんら関係しないことが分かる。

一方、文(34c)では、行為の被害者[行為を被り受け、経験するもの](undergoer)は、語/don/がその後ろに付帯している名詞/okomoji/によって表されている。だが、語/don/は、/ba/と同じような働きを持つ語とは考えられない。(35a)が変に聞こえることから、whatever is alright, for example, ... の意味を持っていることが分かる。

- (35) a. ? gochisou don kuw-oi.
feast ? eat-let's
'Let's have whatever is alright, for example, a feast.'
- b. okomoji don kuw-oi. (= (34c))
pickles ? eat-let's
'Let's eat whatever is alright, for example, pickles.'

何でもいいと言っておきながら、その例としてご馳走をあげるのは変であるから。つまり、(34c)の意味は、Let's eat pickles ではなく、むしろ、Let's eat whatever is alright, for example, pickles に近いということが分かった。

主格の場合と同様に、文において、動詞は文末に現れることを含めて、定理(36)を佐賀西部方言の対格 (accusative) として提案する。^{*15}

- (36) [定理：佐賀西部方言における対格 (accusative)] 佐賀西部方言では、動詞が与えられるとして、その動詞の前に与えられる名詞について、その動詞の対格を、/ba/がその名詞のすぐ後ろに付帯することで表される。^{*16}

^{*15} 脚注*8を参照してほしい。

^{*16} 脚注*6を参照してほしい。

この定理(36)と意味役割に関する定理(33)によって、「ば」が後ろに付帯した名詞は、その後ろに出てくる動詞が表す行為の被害者、行為を被り受け、経験するものを表すことになる。本書では、/ba/を佐賀西部方言の対格の格形式と呼ぶ。(日本語標準語では/wo/が対格の格形式である。)この定理を対格の格形式の観点から捉えなおすと、定理(37)となる。

- (37) [定理：佐賀西部方言における対格 (accusative) の格形式の性質] 佐賀西部方言の格形式/ba/は、名詞を補語として取り、その名詞を、後ろに出てくる動詞の対格であると特定する。^{*17}

この定理(37)と意味役割に関する定理(33)によって、「ば」を名詞の後ろに付帯すれば、その名詞は、その後ろに出てくる繫辞以外の動詞の表す行為の被害者、行為を被り、受け、経験するものを表す。

ここで、格に関する定理(36)と(37)から、どんな種類の動詞が、その後ろに/ba/の付帯した名詞、対格句 (accusative phrase) といっしょに現れるについて、以下のような定理が導かれる。

- (38) [定理：対格句と一緒に現れる動詞] 対格句と一緒に現れる動詞は、行為を表す動詞で、かつ、その出来事の意味の役割に、被害者、その行為を被り、受け、経験するもの (undergoer) を持つ動詞である。

行為を表す動詞で、かつ、その出来事の意味の役割に、被害者、その行為を被り、受け、経験するもの (undergoer) を持つ動詞を他動詞 (transitive verb) と呼ぶ。行為を表す動詞で、かつ、その出来事の意味の役割に、被害者、その行為を被り、受け、経験するもの (undergoer) を持たない動詞を自動詞 (intransitive verb) と呼ぶ。例えば、「驚く」は自動詞で、「驚かす」は他動詞であり、この違いが、語列(39b)が文ではなく、語列(39a)が文であることを簡単に説明する。

- (39) a. hebi no kodon ba odorokas-u.
snake Nom child Acc surprise-Nonpast
'A snake will surprise the child.'

- b. *hebi no kodon ba odorok-u.
snake Nom child Acc get-surprised-Nonpast

語列(39b)では、対格句/kodon ba/の動詞は自動詞/odoroku/なので文ではなく、語列(39a)では、対格句/kodon ba/の動詞は他動詞/odorokasu/なので、語列(39b)中のような問題は起こらず、文である。もちろん、自動詞や他動詞は簡便のため用いられるもの

^{*17} 脚注*6を参照してほしい。

で、語列(39b)と語列(39a)の違いを、より根本的な意味役割と対格句の定理から、以下のように、説明できる。名詞/kodon/に付帯する対格形式/ba/は、その名詞が後続する動詞の表す行為の被害者を表し、動詞/odoroku/はそれが表す行為に被害者の意味役割を持っていないために、語列(39b)は文法的に正しくなく、一方、動詞/odorokasu/はそれが表す行為に被害者の意味役割を持っているために、語列(39a)は文法的に正しい。

2.3 格形式に関する第2言語習得者の間違い

日本語や佐賀西部方言のように、名詞のすぐ後ろに付帯する形式によって、その名詞が、関連する動詞の表す状態や行為のどのような意味役割を表すかが決まる格の体系を外国人が理解し、言語使用において求められるように、瞬時に使えるようになるには、かなり時間がかかる。例えば、英語などの欧米の言語のように、語順によってそれが関連する動詞の表す状態や行為のどのような意味役割を表すかが決まっている、つまり、語順が格を決める言語を母語とする学習者にはそうである。第1言語で無意識に語順に意味があるとして計算していることを意識的に停止しなければならない。これが難しい。例えば、語順に意味がある言語を母語とする佐賀西部方言学習者は、children will eat clams と意図しながら、間違っ(40b)と言ったり、偶然にも正しく(40a)と言ったりするだろう。

- (40) a. kodon no agemaki ba tabu?. [= tabe-ru]
 child Nom clam Acc eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will eat clams.’
- b. kodon ba agemaki no tabu?. [= tabe-ru]
 child Acc clam Nom eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Clams will eat children.’

彼らは、行為の行為者を表すよう意図している名詞「子ども」を最初に発し、行為の被害者を表す名詞「アゲマキ」を次に発しているため、どちらの文も正しく、children will eat clams を意味するはずだと考える。これは間違いである。格を決めるのは、語順ではなく、名詞の後ろに付帯している音/no/や/ba/なのであり、文(40b)は実際には、意図に反して、「アゲマキが子供を食べる」を意味するのである。文(40a)が話者の意図をうまく伝えている理由は、語順によるのではなく、格形式が表したい意味に従って、適切に正しい名詞に付帯していたからである。

同様に、語順に意味がある言語を母語とする佐賀西部方言学習者は、真の意図が children will eat clams という意味を伝えたいとき、(41a)や(41b)と言って、間違えたと思うだろう。

- (41) a. *agemaki ba kodon no tabu?* [= *tabe-ru*]
 clam Acc child Nom eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will eat clams.’
- b. *agemaki no kodon ba tabu?* [= *tabe-ru*]
 clam Nom child Acc eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Clams will eat children.’

実際は、文(41b)は確かに意図を伝えておらず、間違いだが、文(41a)は偶然にも、真の意図通り、正しかった。前の例の場合と同様に、彼らは、間違っ、行為の行為者を表すよう意図していなかった名詞「アゲマキ」を、最初に発し、行為の被害者を表す名詞「子ども」を次に発している、どちらの文も正しくなく、*children will eat clams*を意味しないはずだと考えている。これは間違いである。格を決めるのは、語順ではなく、名詞の後ろに付帯している音/no/や/ba/なのであり、文(41a)は実際には、間違いだと思ったことに反して、「子供がアゲマキを食べる」を意味するのである。また、文(41b)が話者の意図をうまく伝えていない理由は、語順によるのではなく、間違いだと思ったことに反して、格形式が表したい意図に従って、適切に正しい名詞に付帯していたからである。学習者がこのような佐賀西部方言の格の系を理解するには、格について学んだら、次々に、例(41a)や(40b)を聞いて意味を正しく取ったりする練習を繰り返すことが必要である。

2.4 格形式と後置詞の違い

後置詞との対比から、格形式の働きの性質を見て、格形式がどのように言語の文法と深く関わり合うかを見てみよう。

2.4.1 対応する提題文に関連して

格形式と後置詞の違いによって生じる対比的な現象がさまざまある。格形式と後置詞の違いは、例えば、それらを含む文に対応する提題文の違いに現れる。^{*18} 佐賀西部方言では日本語の標準語と同様、/wa/を含む文(27c)で見たように、提題詞(topic form)は/wa/である。まず、後置詞の場合を見てみよう。いかなる後置詞も、格形式が動詞の表す状態か行為の意味役割を特定するのは異なり、(42)中の後置詞/kara/のように、それ自体に意味がある。

*18 他には、例えば、数量詞に関連する現象や「動詞[現在分詞形]方」に関連する現象などがある。

- (42) *agemaki kara tabu?*
 clams from eat[Nonpast]
 ‘(They) will eat (them) from jackknife clams.’

後置詞は、補語（名詞）を取って、後置詞句となり、その後置詞句が動詞と一緒に起こるといふ働きに加えて、それ自体、真偽条件的な意味（/kara/の場合は‘from’）を持っている。あるいは、後置詞は、それ自体、真偽条件的な意味（/kara/の場合は‘from’）を持っており、その意味に、補語（名詞）を取って、後置詞句となり、その後置詞句が動詞と一緒に起こるといふ働きを含んでいるといえる。

例えば、後置詞/kara/は、文法的な働きだけを特定するのではなく、真偽条件的な意味を持っているので、

- 後置詞を含む文(42)に関連して、その後置詞の補語(名詞)を文全体の提題(topic)にするには、文(43b)のように、後置詞の直後に提題詞を付帯すればよい。提題詞だけを後置詞に置き換えた語列(43a)はこの目的には使えない。

- (43) a. **agemaki wa tabu?* [= *tabe-ru*]
 clams Top eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘As for jackknife clams, (they) will eat them.’
- b. *agemaki kara wa tabu?* [= *tabe-ru*]
 page-50 from Top read-[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘As for jackknife clams, (they) will eat (foods) from them.’

後置詞を含む文(42)と後置詞の代わりに提題詞だけがある文(43a)は、どのような状況で真であるかについては異なる。アゲマキを含んで、さまざまな食べ物が出されている文脈で発話された場合、文(42) */agemaki kara tabu?/* はアゲマキからそして少なくとももうひとつは食べ物を食べる場合に真であるが、文(43a)はアゲマキだけ食べる場合であっても真である。/kara/は真偽条件的な意味を持っているから、もし、それが提題詞/wa/の直前に生起しなければ、(43a)のように、その後置詞の意味は現れないし、もし、それが提題詞/wa/の直前に/kara/-/wa/と生起すれば、それは文としても成り立ち、かつ、(43b)のように、/kara/の意味が残る。それで、ふたつの文(42)と(43b)は、何が提題(topic)であるかに関しては異なるが、どのような状況で真であるかについては同じである。^{*19} 後置詞/kara/と同じように、後置詞/de/についてもここで述べたようにそれを含む文に対応する提題文に関して同じような議論ができる。

^{*19} 文(42)は提題詞句を含まないが、提題詞句のない文は、関連ある事柄は何か争点であるような文脈における発話と考えられ、このような場合、関連ある事柄(出来事)が提題であると考えられる。

一方、後置詞に対して、格形式は、それ自体は真偽条件的な意味を持たず、修飾する動詞に対するその補語(名詞)の文法的な働きを特定するだけであると仮定することで、

- 主格句を含む文(44)において、その主格形式の補語(名詞)を文全体の提題(topic)にするには、文(45a)のように、提題詞だけを主格形式に置き換えればよくて、主格形式の直後に提題詞を付帯させた語列(45b)は文法的に正しくないこと、そして、
- 同様に、対格句を含む文(46)において、その対格形式の補語(名詞)を文全体の提題(topic)にするには、文(47a)のように、提題詞だけを対格形式に置き換えればよくて、対格形式の直後に提題詞を付帯させた語列(47b)は文法的に正しくないこと

を以下のように簡単に説明することができる。

- (44) kodon no nu? [= ne-ru]
 child Nom sleep[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will sleep.’
- (45) a. kodon wa nu? [= ne-ru]
 child Top sleep[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘As for the children, they will sleep.’
- b. *kodon no wa nu? [= ne-ru]
 child Nom Top sleep[Nonpast] [stndrd Jpns]
- (46) agemaki ba tabu? [= tabe-ru]
 clams Acc eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘(They) will eat jackknife clams.’
- (47) a. agemaki wa tabu? [= tabe-ru]
 clam Top eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘As for jackknife clams, (they) will eat them.’
- b. *agemaki ba wa tabu? [= tabe-ru]
 clam Acc Top eat[Nonpast] [stndrd Jpns]

与えられている文の意味から分かるように、文(44)と文(45a)とは、何が提題(topic)であるかに関しては異なるが、どのような状況で真であるかについては同じである。^{*20}

^{*20} 文(44)では提題詞句がないが、そのような場合の提題については、脚注*19を見てほしい。

これは、/no/が主格という文法の働きを特定するだけで、真偽条件的な意味を持たないからである。また、/no/が主格という文法の働きを特定するだけで、真偽条件的な意味を持たないから、同様な文法の働きを持つ提題詞/wa/があれば、その前に/no/が生起できず、このため/no/-/wa/がある語列(45b)は文として成り立たない。^{*21}

同様な議論が対格形式にも当たる。与えられている文の意味から分かるように、文(46)と文(47a)とは、何が提題(topic)であるかに関しては異なるが、どのような状況で真であるかについては同じである。^{*22} これは、/ba/が対格という文法の働きを特定するだけで、真偽条件的な意味を持たないからである。また、/ba/が対格という文法の働きを特定するだけで、真偽条件的な意味を持たないから、同様な文法の働きを持つ提題詞/wa/があれば、その前に/ba/が生起できず、このため/ba/-/wa/がある語列(47b)は文として成り立たない。^{*23}

2.4.2 対応する受身文や使役文に関連して

格形式と後置詞の違いは、例えば、それらを含む文に対応する使役文や受身文の違いにも現れる。

- 使役形態の現在形は、/tabe-saseru/ ‘eat-make’ や/yom-aseru/ ‘read-make’ のように標準語では/(s)aseru/であるが、佐賀西部方言では、/tabe-sasu?/ ‘eat-make’ や/yom-asu?/ ‘read-make’ のように/(s)asu?/ ‘let/make/cause[Nonpast]’ であり、
- 受身形態の現在形は、/tabe-rareru/ ‘eat-Pass’ や/yom-areru/ ‘read-Pass’ のように標準語では/(r)areru/であるが、佐賀西部方言では、/tabe-raru?/ ‘eat-Pass’ や/yom-aru?/ ‘read-Pass’ のように/(r)aru?/ ‘Passive[Nonpast]’ である。

まず後置詞の場合を見てみよう。標準語と同様に、佐賀西部方言にも後置詞/kara/ ‘from’ がある。前節で述べたように、後置詞は、文(42)(= (48b))と(48a)中の後置詞/kara/のように、それ自体に意味がある。

- (48) a. kodon kara nu?
 child from sleep[Nonpast]
 ‘(They) will sleep from children.’

^{*21} 提題詞/wa/の働きについて脚注*7で触れているので、そこを見てほしい。

^{*22} 文(46)では提題詞句がないが、そのような場合の提題については、脚注*19を見てほしい。

^{*23} 提題詞/wa/の働きについて脚注*7で触れているので、そこを見てほしい。

- b. *agemaki kara tabu?* (= (42))
 clams from eat[Nonpast]
 ‘(They) will eat (them) from jackknife clams.’

例えば、後置詞/*kara*/は、文法的な働きだけを特定するのではなく、真偽条件的な意味を持っているので、

- 後置詞を含む文(48a)に関連して、その文の動詞を使役形態の補語とし、後置詞と補語の動詞の表す行為との関係を保つには、文(49b)のように、後置詞を残したままその直後に対格形式を付帯しなければならない。対格形式/*ba*/だけを後置詞/*kara*/に置き換えた語列(49a)では、後置詞と補語の動詞の表す行為との関係を保てない。
- 同様に、後置詞を含む文(48b)に関連して、その文の動詞を受身形態の補語とし、後置詞と補語動詞の表す行為との関係を保つには、文(50b)のように、後置詞を残したままその直後に主格形式を付帯しなければならない。主格形式/*no*/だけを後置詞/*kara*/に置き換えた語列(50a)では、後置詞と補語の動詞の表す行為との関係を保てない。

- (49) a. *kodon ba ne-sasu?* [= *sase-ru*]
 child Acc sleep-make[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘(They) will make children sleep.’

‘* They will make (them) sleep from children.’

- b. ?*kodon kara ba ne-sasu?* [= *sase-ru*]
 child from Acc sleep-make[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘(They) will make (them) sleep from children.’

- (50) a. *agemaki no tabe-raru?* [= *rare-ru*]
 clams Nom eat-Pass[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘The jackknife clams will be eaten.’

‘* They will be eaten from jackknife clams.’

- b. ?*agemaki kara no tabe-raruG.* [= *rare-ru*]
 clams from Nom eat-Pass[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Foods from jackknife clams will be eaten.’

文(48a)中の/kara/の意味あるいは働きを、対格形式/ba/の働きと使役形態/(s)asu?/の働きだけによって、(49a)のように、表すことはできない。また、文(48b)中の/kara/の意味あるいは働きを、主格形式/no/の働きと受身形態/(r)aru?/の働きだけによって、(50a)のように、表すことはできない。これらの理由は、/kara/が真偽条件的な意味をそれ自体が持っているからである。

一方、格形式は、それ自体は真偽条件的な意味を持たず、修飾する動詞に対するその補語(名詞)の文法的な働きを特定するだけであると仮定することで、

- 主格句を含む文(51)に関連して、その動詞を使役形態の補語とし、その主格形式の補語(名詞)が、この文(51)中のように、使役形態の補語の動詞の表す行為 sleep' の行為者(actor)を表わすようにするには、文(52a)のように、主格形式を対格形式に置き換えればよくて、主格形式/no/を対格形式/ba/の後に付帯した語列(52b)では、主格形式の補語(名詞)を使役形態の補語の動詞の表す行為の行為者(actor)にはできないこと、また、
- 対格句を含む文(53)に関連して、その動詞を受身形態の補語とし、その対格形式の補語(名詞)が、この文(53)中のように、受身形態の補語の動詞の表す行為 eat' の被害者(undergoer)を表すようにするには、文(54a)のように、対格形式を主格形式に置き換えればよくて、主格形式/no/を対格形式/ba/の後に付帯した語列(54b)では、対格形式の補語(名詞)を受身形態の補語の動詞の表す行為の被害者(undergoer)にはできないこと

を以下のように簡単に説明することができる。

(51) kodon no nu?. [= ne-ru]
 child Nom sleep[Nonpast] [stndrd Jpns]
 'Children will sleep.'

(52) a. kodon ba ne-sasu?. [= sase-ru]
 child Acc sleep-make[Nonpast] [stndrd Jpns]
 '(They) will make the children sleep.'

b. *kodon no ba ne-sasu?. [= sase-ru]
 child Nom Acc sleep-make[Nonpast] [stndrd Jpns]

(53) agemaki ba tabu? [= tabe-ru]
 clam Acc eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 '(They) will eat jackknife clams.'

(54) a. *agemaki no tabe-raru?*. [= *rare-ru*]
clam Nom eat-Pass[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘The jackknife clams will be eaten.’

b. **agemaki ba no tabe-raru?*. [= *rare-ru*]
clam Acc Nom eat-Pass[Nonpast] [stndrd Jpns]

主格形式/*no*/はその補語(名詞)の文法的な働きを特定するだけであるから、使役形態/*(s)asu?*/と対格形式/*ba*/との働きだけで、(52a)のように、それ(この場合は(51)中の主格の働き)を特定できる。(もし主格形式が後置詞のようにそれ自体に真偽条件的な意味を持っていたら、それを使役形態/*(s)asu?*/と対格形式/*ba*/との働きだけでは、(47a)の場合のように、特定できなかつたろうし、また、(47a)中で/*ba*/-/*no*/も文法的に可能であつたろう。)対格形式についても同様である。対格形式/*ba*/はその補語(名詞)の文法的な働きを特定するだけであるから、受身形態/*(r)aru?*/と主格形式/*no*/との働きだけで、(54a)のように、それ(この場合は(53)中の対格の働き)を特定できる。(もし対格形式が後置詞のようにそれ自体に真偽条件的な意味を持っていたら、それを受身形態/*(r)aru?*/と主格形式/*no*/との働きだけでは、(54b)の場合のように、特定できなかつたろうし、また、(54b)中で/*ba*/-/*no*/も文法的に可能であつたろう。)

2.5 佐賀西部方言の文法 # 2

以上の議論を基にして、佐賀西部方言の文法、ここでは統語論のみを、佐賀西部方言の文法 # 2 として提案する。

- Rule 0: initial symbol: S
- Rule 1: S → NOMP VI
- Rule 2: S → NOMP VP
- Rule 3: VP → ACCP VT
- Rule 4: NOMP → N NOM1
- Rule 5: NOMP → N NOM2
- Rule 6: ACCP → N ACC
- Rule 7: VI → naku
- Rule 8: VI → nu? %neru
- Rule 9: VI → hukuru? %hukureru
- Rule 10: VI → odoroku
- Rule 11: VT → tabu?
- Rule 12: VT → odorokasu
- Rule 13: NOM1 → no
- Rule 14: NOM2 → ga
- Rule 15: ACC → ba %(w)o
- Rule 16: N → hebi
- Rule 17: N → agemaki
- Rule 18: N → kodon %kodomo
- Rule 19: N → meshi %gohan
- Rule 20: N → heya

図 2.1 佐賀西部方言の文法 # 2

文法 # 1 では動詞は自動詞しかなく、かつそれらを単に V としていたが、文法 # 2 では、動詞を他動詞 (transitive verb: VT) と自動詞 (intransitive verb: VI) とに分けている。規則 7 から 10 までは、/naku/、/nu?/、/hukuru?/、/odoroku/のそれぞれを自動詞 (VI) とする規則であり、規則 11 と 12 は、/tabu?/と /odorokasu/とをそれぞれ他動詞 (VT) とする規則である。前の節で議論したように、他動詞 (VT) は対格句 (ACCP) といっしょに現れるのに、自動詞はいっしょに現れないことを、この文法では、規則 3 VP → ACCP VT があるが、一方、VP → ACCP VI というような規則はないことで説明する。VP は動詞句 (verb phrase) である。主格形式と主格句の関係と同様に、規則 6 と 15 は、対格形式を特定し、対格形式が名詞を補語として取って、対格句となることを示している。主格句 (NOMP) は、規則 1 のように、自動詞 (VI) といっしょに生起して文 (S) となるか、あるいは、規則 2 のように、動詞句 (VP) といっしょに生起して文 (S) となる。規則 2 と規則 3 によって、他動詞は主格句と対格句と一緒に生起することが説明

される。(ここで、規則2と3の代わりに、 $S \rightarrow \text{NOMP ACCP VT}$ という規則を作ってもよかっただろう)。規則13と14は、佐賀西部方言では主格形式が/no/と/ga/のふたつがあることを示している。主格形式/no/はNOM1とされ、主格形式/ga/はNOM2とされている。この章の節2.1で佐賀西部方言では/no/と/ga/が主格形式で、/ba/が対格形式であることを導いた際に使った意味の概念、意味役割(出来事、行為、状態、主題、行為者、被害者)を使った意味論をこの統語論に並行させられるであろうが、意味論部分はここでは割愛する。

これで、発展した理論、佐賀西部方言の統語理論#2が出来上がった。では、この理論が正しい予測を産むかどうかを見てみよう。佐賀西部方言の文法#2は、語列(40a)(ここでは(55)として繰り返し与えられている)を、図2.2のように、文と分析する。

- (55) kodon no agetaki ba tabu?. [= tabe-ru]
 child Nom clam Acc eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will eat clams.’

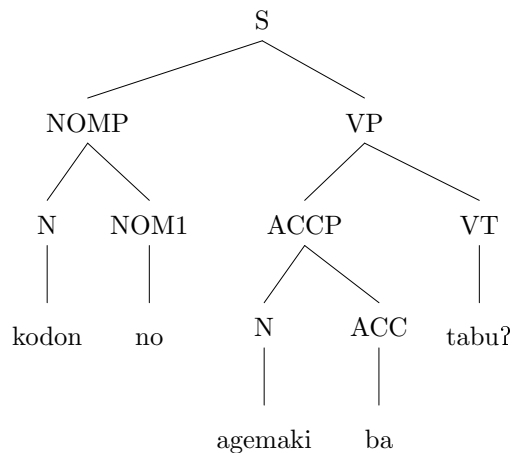


図2.2 佐賀西部方言の文法#2による‘kodon no agetaki ba tabu?’の分析

動詞/tabu?/は他動詞(VT)であるから、対格句といっしょに生起して、動詞句をなすことができる。この予測は、この語列に関する佐賀西部方言の母語話者の文かどうかに関する判断と矛盾せず、佐賀西部方言の文法#2はこの語列によって反証されない。

対格句と自動詞がいっしょに生起している語列(56)に関しては、佐賀西部方言文法#2は、図2.3に分析されているように、それが文ではないと正しく予測する。

- (56) *kodon no agetaki ba nu?. [= ne-ru]
 child Nom clam Acc sleep[Nonpast] [stndrd Jpns]

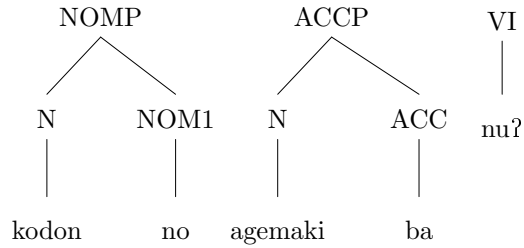


図 2.3 佐賀西部方言の文法 # 2 による ‘kodon no agemaki ba nu?’

文法 # 2 には、自動詞と対格句がこの順に並んでも、それを全体として動詞句とするような規則はなく、対格句/agemaki ba/と自動詞/nu?/は全体として動詞句 (VP) とは分析されない。佐賀西部方言の母語話者のこの語列に関する文かどうかについての判断、詳しく言うと、(56) が非文であるという判断と矛盾することなく、佐賀西部方言の文法 # 2 は、この語列に関して正しい予測を産む。

文 (55) の主格句と対格句の語順を換えた文 (主格句と対格句とを「かき混ぜた」文) (57) (= (41a)) については、佐賀西部方言の文法 # 2 は、図 2.4 で分析されているように、文ではないと予測する。

(57) agemaki ba kodon no tabu?. [= tabe-ru]
 clam Acc child Nom eat[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will eat clams.’

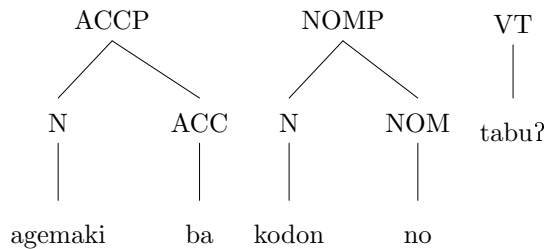


図 2.4 佐賀西部方言の文法 # 2 による ‘agemaki ba kodon no tabu?’

佐賀西部方言に、例えば、 $S \rightarrow \text{ACCP NOMP VT}$ というような規則はなく、この語列は、図 2.4 以上には、分析されない。一方、佐賀西部方言の母語話者は、この文は文 (55) /kodon no agemaki ba tabu?/と同じ意味を持ち、もちろん、文法的に正しい文であると判断する。このように、佐賀西部方言の文法 # 2 は、母語話者の判断をうまく予測できず、語列 (57) によって反証された。日本語と同様に、このように、佐賀西部方言にも「かき混ぜ」という現象がある。「かき混ぜ」現象とは、主格句、対格句、副詞、後置詞

句との間の語順は、修飾する動詞の前にある限りは、文の真偽条件的な意味に関係がないというものである。本書では、この現象を取り扱わない。^{*24}

2.6 [練習問題]

この問題は、日本語および佐賀西部方言における他の言語からの「借用」に関するものである。よく使われる日本語の借用には、「ハンサムな人」における「ハンサムな」や「ポケモンをゲットする」の「ゲットする」がある。佐賀西部方言では、「ハンサムか人」、「ポケモンばゲットすっ」である。内容を表す部分はそのままだ借用するが、前者では、文法的な部分の「な」や「か」、後者では文法的な部分の「する」や「すっ」は日本語や方言をそのまま残している。ここでの問題は「オープンする」の佐賀西部方言である。

[問題] 佐賀西部方言の文法#2は、語/mise/, /shachoo/, /oopunsu?/を導入する規則(例えば、N → mise)をもとより含んでいないので、文(58)と(59)のどちらにも反証される。

(58) mise no oopunsu?. [= oopunsuru]
store Nom open[Nonpast] [stndrd Jpns]
'A store will open.'

(59) shachoo no mise ba oopunsu?. [= oopunsuru]
president Nom store Acc open[Nonpast] [stndrd Jpns]
'The president will open a store.'

1) これらふたつの文(58)と(59)を正しく予測するような新しい文法2.1を創りなさい。ただし、できるだけ佐賀西部方言の文法#2(図2.1に与えられたもの)を活かして、例えば、佐賀西部方言の文法#2(図2.1)にいくつかの規則を加えて、そのような文法を作りなさい。以下のヒントを参考にす。2) 次に、これらふたつの文(58)と(59)に関して、新しい文法がどのような予測を産むか書きなさい。

[ヒント]:文(58)と文(60)とで対比されるように、動詞'oopunsu?' 'open' と動詞'tabu?' 'eat'には違いがある。文(58)の解釈では、行為は、被害者(undergoer)を含まないが、文(60)の解釈では、行為は被害者(undergoer)を含む。これから、文(60)中の動詞'tabu?'と文(61)(= (40a))中のそれとは同じ種類の動詞だが、文(58)中の動詞'oopunsu?'と文(59)中のそれとは同じ種類の動詞ではない。

^{*24} 言語学研究の最前線では、「かき混ぜ」現象について、さまざまな分析が提案されている。興味のある読者は、例えば、Koga (2000)を参照してほしい。

(60) kodon no tabu?. [= tabe-ru]
child Nom eat [Nonpast] [stndrd Jpns]
'Children will eat (it/them).'

(61) kodon no agemaki ba tabu?. [= tabe-ru]
child Nom clam Acc eat [Nonpast] [stndrd Jpns]
'Children will eat clams.'

[解答]:

- 新しい文法 # 2.1 は、文法 # 2 におけるすべての規則と以下の規則を加えたものである:

– N → mise

–

–

–

–

- 文 (58) に関する予測:

- 文 (59) に関する予測:

第3章

時制と動詞の形態

同一の意味を持ち、同一の統語的な種類（統語範疇）に属する形態でありながらも、異なる形態がある。たとえば、英語の過去の意味を持つ形態は、[d]、[t]、[ɪd] である。^{*1} ある形態種の動詞の語幹 V は、他のある形態 T と結合するとき、その（T の）うちの特定の形態としか結合しない。英語の *investigate* を過去のことを表そうとしたら、[ɪd] としか結合させられないし、英語の *talk* では [t] としか結合させられない。結合を間違えても、その言語を第2言語として学習する人には、大きな間違いとは思われないが、その言語を教えたことのない母語話者には、思いもよらず、間違いを訂正してわかってくれたりはしない。*talk*、[tɔ:k] が過去に起こったのであれば、[tɔ:kt] と言う。[tɔ:kɪd] と言ったら、母語話者にはまったく通じないし、[tɔ:kd] と言ってもぜんぜん通じない。英語を学ぶ人には、小さなミスで、話している母語話者の人も気を利かして分かってくれるだろうと思うが、悪意も全然なく、まったく分かってくれない。母語話者は自分の言語を分析したことがないので、思いやろうと思っても、できない。日本語や佐賀西部方言の場合もこれは当てはまる。日本語学習者にとって、格形式の使い方の次に、難しいのは、動詞の原形に、いろいろな形態を結合させるときに、その異形態のうち、どの形態を使うかを知ることである。日本語の母語話者は、これに関して学習者が間違ったら、英語の母語話者の場合と同様、まったく分からない。この章では、佐賀西部方言の動詞と時制の形態を学ぶが、その前に、1～2節で、標準語の動詞の分類を見てみる。

^{*1} 基底形は/d/と考えると、他の異形態を音韻規則によって導くことも可能であろう。1) 動詞が無声音 (unvoiced sound) で終われば、[tɔ:kt] というように、その後の/d/も無声化し、/t/と発音され、2) /d/と同じ位置「上の歯茎の裏側」を発音するとき使う音/t/や/d/の後では、[vɪzɪtɪd] というように、/i/が挿入されるというように。

| | |
|---|--------------------------------------|
| 子音終末語幹動詞 | 例、/tsukur/ ‘make’、/hanas/ ‘talk’ |
| 語幹の終末子音は以下の9つの子音のいずれかである： /w/、/t/、/r/、/m/、/b/、/n/、/k/、/g/、あるいは、/s/ | |
| 非過去・否定形は/-anai/で終わる。 | |
| 母音終末語幹動詞 | 例、/tabe/ ‘eat’、/mi/ ‘look at; watch’ |
| 語幹は母音/e/かあるいは母音/i/かで終わる。 | |
| 非過去・否定形は/-e-nai/か、あるいは、/-i-nai/で終わり、 非過去・否定形が/-i-nai/で終わる場合、その非過去形は、/-i-ru/で終わる。 | |
| 強変化語幹動詞 /k/ | 例、/motte k/ ‘bring; come having’ |
| 語幹は、意味が‘come’である子音/k/で終わる。 | |
| 非過去・否定形は/-o-nai/で終わる。 | |
| 強変化語幹動詞 /s/ | 例、/kenkyuu s/ ‘research’ |
| 語幹は、意味が‘do’である子音/s/で終わり、かつ、/s/の前がひとつの漢字の音でない。 | |
| 非過去・否定形は/-i-nai/で終わり、非過去形は/-u-ru/で終わる。 | |

図 3.1 日本語の動詞の形態分類

3.1 標準語の動詞の形態分類

後で明らかにされるように、佐賀西部方言における動詞の形態の分類は、標準語における動詞の形態分類と同じであり、語幹がひとつの形態種において異なるだけである。他の違いは、例えば、標準語の動詞の現在形「ふざける」は佐賀西部方言では「ひょうぐっ」のように、語彙自体が異なる場合である。このセクションでは、まず標準語の動詞の形態分類を見る。

日本語では、いかなる動詞も、その語幹の形態によって、図 3.1 の4つの種類のどれかひとつに属する。強変化動詞のふたつは、異なる形態種である。本節の最後に分類について触れるが、強変化動詞を除けば、辞書形（現在（＝非過去）形）が/-iru/でも/-eru/でも終わっていなければ子音終末語幹動詞である。

図 3.1 中のそれぞれの種類の形態が他の形態、ここでは、丁寧、現在（＝非過去）、過去、否定の形態とどのように結合しているかを観察し、なぜ、動詞の語幹を図 3.1 中で示されているように仮定するのがいいかを議論する。子音終末語幹動詞の語幹は、(62) の/hanas/ ‘talk’ と(63) の/tsukur/ ‘make’ のように、現在形から終末の/u/を削除したものと仮定する。

- (62) a. hanas imas u
talk Polite Nonpast
- b. hanas imas ita
talk Polite Past
- c. hanas u
talk Nonpast
- d. hanas ita
talk Past
- e. hanas anai
talk not

- (63) a. tsukur imas u
make Polite Nonpast
- b. tsukur imas ita
make Polite Past
- c. tsukur u
make Nonpast
- d. tsukutta cf. tsukur itari
make[Past]
- e. tsukur anai
make not

このように仮定すると、他の形態、丁寧、現在 (= 非過去) 過去、否定の形態は、(62a) ~ (63e) のようになる。例えば、語幹が /tsukur/ であることにより、(63c) から非過去は /u/ となり、(63e) から非過去・否定形態は /anai/ となる。非過去が /u/ であることと (63a) とから丁寧形態は /imas/ となる。丁寧形態が /imas/ であることと (63b) とから過去形態は /ita/ となる。これらから、動詞 /tsukur/ の過去形は /tsukur-ita/ となるはずである。しかし、実際は、/tsukutta/ である。古典の /tsukur-itari/ ‘have made’ から類推して、/tsukur-ita/ が基底にあると考える。そして、/tsukur-ita/ の代わりに /tsukut-ta/ が発音されると考える。基底 /tsukur-ita/ の代わりに、その中の /i/ が削除され、さらに、/r/ が後続する /t/ に同化した /tsukut-ta/ が発音されると考える。動詞 /hanas/ の過去形は、予測どおり、/hanas(h)-ita/ で正しい。子音終末語幹動詞の語幹の終末は次の9つの子音のうちのどれかである：/w/、/t/、/r/、/m/、/b/、/n/、/k/、/g/、/s/。

例えば、(63a) ~ (63e) に出てきた ‘make’ の意味の動詞の語幹を /tsuku/ と仮定してみよう (この仮定は後に却下される)。そうすると、(63c) から、現在 (= 非過去) 形態

は/ru/となり、後述の母音終末語幹動詞に対する現在 (= 非過去) 形態が/ru/であることと同じになり、よさそうに見える。ところが、この語幹を/tsuku/と仮定すると、(62a) ~ (62e) に出てきた 'talk' の意味の動詞の語幹を/hana/と仮定することになる。そうすると、例えば、(62c) から、この動詞については/su/が非過去であることになり、非過去の形態が/ru/と/su/が存在し複雑になってしまう。よって、この語幹の仮定は採用しない方がいい。

子音終末語幹動詞の現在形が「う」で終わる動詞、例えば、「会う」_u、「言う」_u、「思う」_u、「食う」_u、「払う」の語幹が、/aw/、/iw/、/omow/、/kuw/のように、すべて/w/で終わると仮定すると、例えば、その否定形が*「会はない/a-anai/」ではなく「会わない/aw-anai/」である事実を簡単に説明できる。

- (64) a. a(w) imas u
meet Polite Nonpast
- b. a(w) imas ita
meet Polite Past
- c. a(w) u
meet Nonpast
- d. atta cf. aw itari
meet[Past]
- e. aw anai
meet not

このように語幹を仮定すると、他の形態との結合 (64a) ~ (64d) では問題がありそうに見えるが、そうではない。子音/w/に、/a/でない母音が連なると、/w/が発音されないこと、例えば、/wi/の代わりに/i/が発音され、/wu/の代わりに/u/が発音されることは、日本語のどこでも現れる現象である。^{*2} なお、この動詞の語幹は/aw/であるから、この動詞の過去形は、/a(w)-ita/となるはずである。しかし、実際は、/at-ta/である。古典の/aw-itari/ 'have met' から類推して、/aw-ita/が基底にあると考える。そして、/aw-ita/の代わりに/at-ta/が発音されると考える。基底/aw-ita/の代わりに、その中の/i/が削除され、さらに、/w/が後続する/t/に同化した/at-ta/が発音されると考える。^{*3} この分析は、少し古典の響きのある「問う」の過去形が「問った」ではなく、「問う

^{*2} 同様に、/we/の代わりに/e/が発音され、/wo/の代わりに/o/が発音されるのも日本語のどんなところでも現れる現象である。例えば、'can meet' は、/aw-e-ru/は/a-e-ru/であり、'let's meet' は/aw-ou/は/a-ou/である。

^{*3} 子音終末語幹動詞の終末が/w/、/t/、/r/のときは、/...[w,t,r]-ita/の代わりに/...[t]-ta/が発音される。ここで後者は、前者において、/i/が削除されて、/...[w,t,r]-ta/、それから、その終末の子音 (/w/か/t/か/r/) が後続する/t/に同化したものである。子音終末語幹動詞の終末が/m/、/b/、/n/のとき

た」となることもうまく説明できる；「問う」の基底形は、tow-ita で、基底/tow-ita/の代わりに、その中の/i/が削除され、さらに、古典語の場合は、/w/が後続する/t/に同化しないで、w がそのまま u と発音され、/tou-ta/が発音され则认为る。

子音終末語幹動詞/ik/ ‘go’ の現在形 (= 非過去形) は例外であり、これは第 2 言語習得者を混乱させるようでこれに関連した間違いはとても多い。子音終末語幹動詞/ik/ ‘go’ は、丁寧、現在、否定形態と (65) のように結合するのに対して、子音終末語幹動詞/uk/ ‘float’ は、丁寧、現在、否定形態と (66) のように結合する。

- (65) a. ik imas u
go Polite Nonpast
- b. ik imas ita
go Polite Past
- c. ik u
go Nonpast
- d. *i ita cf. ik itari
go Past
- e. itta
go[Past]
- f. ik anai
go not
- (66) a. uk imas u
float Polite Nonpast
- b. uk imas ita
float Polite Past
- c. uk u
float Nonpast
- d. u ita cf. uk itari
float Past

は、/...[m,b,n]-ita/の代わりに/...[n]-da/が発音される。ここで、後者は、前者において、/i/が削除されて、/...[m,b,n]-ta/、それから、/t/が前にある/m/か/b/か/n/に同化して、/...[m,b,n]-da/、その終末の子音 (/m/か/b/か/n/) が後続する/d/に同化して、/...[n]-da/となっているものである。子音終末語幹動詞の終末が/k/、/g/のときは、/...[k,g]-ita/の代わりに/...-i[t,d]a/が発音される。後者は、前者において、/...[k,g]-ita/から、/t/の前にあるのが/g/であればそれに同化した/...[g]-ida/、/t/の前にあるのが/k/であれば/...[k]-ita/、それから、その終末の子音 (/k/か/g/) が削除されたものである。なお、過去形態を/ta/と考えると、/i/が後で挿入されるという分析もある。

e. * utta
float[Past]

f. uk anai
float not

他の形態との二つの結合の仕方の違いは、現在形との結合で、動詞/ik/ 'go' は、(66d)*/i ita/は正しくなくて、(66e) /itta/が正しいが、一方、動詞/uk/ 'float' は、(67a) /u ita/が正しくて、(67b) /utta/が正しくない。/k/が削除された一方の*/i ita/は正しくなくて、/k/が削除された他方の/u ita/は正しい。/k/を/t/に換えた一方の/itta/は正しくて、/k/を/t/に換えた*/utta/は正しくない。^{*4}

子音終末語幹動詞/ik/ 'go' の現在形 (= 非過去形) が例外であることが、他の/k/で終わる子音終末語幹動詞/kik/ 'listen' の現在形 (67) と/shik/ 'spread' の現在形 (67) によって支持される。

(67) a. ki ita cf. kik itari
listen Past

b. * kitta
listen[Past]

(68) a. shi ita cf. shik itari
spread Past

b. * shitta
spread[Past]

母音終末語幹動詞の語幹は、(69)の/tabe/ 'eat' と(70)の/oki/ 'get up; wake up' のように、その現在形(非過去形)から最後のふたつの音/ru/を削除したものであるとする。

(69) a. tabe mas u
eat Polite Nonpast

b. tabe mas ita
eat Polite Past

c. tabe ru
eat Nonpast

d. tabe ta
eat Past

^{*4} 第2言語習得者は、動詞/ik/の現在形/iku/ 'go'、過去形/itta/ 'went' を例外ではないと記憶違いをして、この型に従って、他の/k/子音終末語幹動詞、例えば、/kaku/ 'write'、*/katta/とするような間違いがとても多い。

e. tabe nai
eat not

(70) a. oki mas u
get-up Polite Nonpast

b. oki mas ita
get-up Polite Past

c. oki ru
get-up Nonpast

d. oki ta
get-up Past

e. oki nai
get-up not

名称どおり、この形態種の動詞の語幹は母音が終末である。子音終末語幹動詞の場合と母音終末語幹動詞の場合では、それらが結合する形態が異なる。丁寧形態は、母音終末語幹動詞では/mas/で、子音終末語幹動詞では/imas/であり、丁寧形態は今のところ/mas ~ imas/である。過去形態は、母音終末語幹動詞では/ta/で、子音終末語幹動詞では/ita/であり、過去形態は今のところ/ta ~ ita/である。非過去形態は、母音終末語幹動詞では/ru/で、子音終末語幹動詞では/u/であり、非過去形態は今のところ/ru ~ u/である。否定形態は、母音終末語幹動詞では/nai/で、子音終末語幹動詞では/anai/であり、否定形態は今のところ/nai ~ anai/である。

ここで、子音終末語幹動詞の場合で得た分析、非過去が/u/であること、それに加えて、非過去形が [taberu] や [okiru] であることから、この種類の動詞の語幹も、子音で終わる/taber/や/okir/であると仮定しよう（これは後に却下される）。そうすると、子音終末語幹動詞に対する丁寧形態や過去形態や否定形の分析を使ったら、それぞれは、*/taber-imas-u/や*/taber-ita/や*/taber-anai/となってしまう。ここで、子音終末語幹での丁寧形態や過去形態や否定形の分析を使わず、それぞれの形態が/mas/、/ta/、/nai/であるとしたら、今度は、子音終末語幹動詞の場合、例えば、/tsukur-[i]-mas/では [i] が挿入され、/tsukur-[a]-nai/では [a] が挿入されることをうまく説明できないであろう。ということから、この/taberu/や/okiru/という種類の動詞も、その語幹を従来どおりの母音終末とした分析が支持される。

強変化語幹動詞の語幹は、(71)の/mottek/ 'bring' と(72)の/kenkyuus/ 'do research' のように、現在形から終末の/uru/を削除したものと仮定する。^{*5}

^{*5} ここで語幹に異形態を許し、強変化動詞 'come' の形態を/k ~ ko/とし、強変化動詞 'do' の形態を/s ~ si/とする分析も可能かもしれない。

- (71) a. mottek imas u
bring Polite Nonpast
- b. mottek imas ita
bring Polite Past
- c. mottek u ru
bring Nonpast Nonpast
- d. mottek ita
bring Past
- e. mottek onai
bring not

- (72) a. kenkyuus imas u
research Polite Nonpast
- b. kenkyuus imas ita
research Polite Past
- c. kenkyuus u ru
research Nonpast Nonpast
- d. kenkyuus ita
research Past
- e. kenkyuus inai
research not

このように、強変化語幹動詞の語幹を/k/と/s/と仮定することで、例えば、(71a)と(71b)、(72a)と(72b)のように丁寧形態と、(71d)、(72d)のように過去形態との強変化語幹動詞の結合を簡単に説明できる。^{*6}(71e)と(72e)から、否定形は強変化語幹動詞/k/に対しては/onai/、強変化語幹動詞/s/に対しては/inai/である。^{*7}(71c)と(72c)から、非過去形態は/uru/となるが、ここでは、非過去形態/u/と非過去形態/ru/が重なったものとする。後で、この考えによって説明される現象を見る。

ここで、強変化語幹動詞/s/ 'do' の語幹を/sur/と仮定したとしよう(この仮定は後に却下される)。そうすると、子音終末語幹動詞と同様に他の形態と結合するとさらに仮定したら、その結合は(73)のようになる。

^{*6} 注*5のように語幹に/ki/と/si/もあると考えても、(71a)と(71b)、(72a)と(72b)のように丁寧形態と、(71d)、(72d)のような過去形態との結合を説明できる。

^{*7} 注*5のように語幹に/si/もあると考え、(72d)の否定形態の異形態/inai/を仮定しないで済む。

- (73) a. *kenkyuusur imas u
 research Polite Nonpast
- b. *kenkyuusur imas ita
 research Polite Past
- c. kenkyuusur u
 research Nonpast
- d. *kenkyuusur ita/kenkyuusut ta
 research Past
- e. *kenkyuusur inai/anai
 research not

強変化語幹動詞の現在形 (= 非過去形) が、(73c) のように正しく予測するためにこのように仮定したとしたら、(73a) (73b) (73d) (73e) のように、あまりに複雑になりすぎる。このためこの仮定を採用するのは得策ではない。なお、第2言語習得者の間違いとして、(73d) */kenkyuusurita/ はよく見られるものである。

強変化動詞の現在形 (非過去形) において非過去形態 /u/ と非過去形態 /ru/ が重なったものと考え、ひとつの漢語に s をつけた子音終末語幹動詞が、その非過去形で、例えば、「愛する、愛す_ル」、「略する、略す_ル」、「制する、制す」というように、長形と短形とがある事実を以下のように説明できる。

- (74) a. ais imas u
 love Polite Nonpast
- b. ais imas ita
 love Polite Past
- c. ais u ru [長形]
 love Nonpast Nonpast
- d. ais u [短形] [古典語の響きがある]
 love Nonpast
- e. ais ita
 love Past
- f. ais anai
 love not

もし、ひとつの漢音 + /s/ が強変化動詞 'do' のひとつであったら、(75) のように他の形態、丁寧、非過去、過去、否定形態と結合したであろう。

- (75) a. ais imas u
love Polite Nonpast
- b. ais imas ita
love Polite Past
- c. ais u ru
love Nonpast Nonpast
- d. ais ita
love Past
- e. *ais inai
love not

問題であるのは、否定形の(75e) /ais-inai/である。^{*8} 実際は、「愛さない/ais-anai」である。よって、ひとつの漢音 + /s/ は、強変化動詞 'do' ではない。^{*9}

子音終末語幹動詞の現在形(辞書形)「要(い)る」や「入((は)い)る」に対して、「居(い)る」は、母音終末語幹動詞の現在形である。例えば、その否定形は、(76)のように、「*居らない」ではなく、「居(い)ない」である。

- (76) a. i ru
be Nonpast
- b. i nai
be not

同様に、子音終末語幹動詞の現在形(辞書形)「帰(かえ)る」に対して、「変(か)える」は、母音終末語幹動詞の現在形である。例えば、その否定形は、(77)のように、「*変えない」ではなく、「変(か)えない」である。

- (77) a. kae ru
change Nonpast
- b. kae nai
change not

なお、「帰る」と「変える」では、送り仮名が違う。さらに、このペアの場合は、アクセントが異なる。「帰る」は、「か」にアクセントがあるが、「変える」は、「え」にアクセントがある。

^{*8} また、ひとつの漢音 + /s/ が強変化動詞 'do' のひとつであるとの仮定では、短形 /ais u/ (古典語の響きがある形) が出てこない。

^{*9} 逆に、強変化動詞 'do' がもしひとつの漢音 + /s/ と同じように他の形態と結合していたら、例えば、文法的に正しくない *「掃除す」や *「掃除さない」も出てきていたであろう。よって、この仮定も成り立たない。これらも、第2言語習得者によく見られる間違いである。

以下に、留学生に教えている動詞の形態の種類をその辞書形(= 現在形、非過去形)から発見する方法「How to Figure out the Morphological Type of verb from its Dictionary Form (or Nonpast Plain Form)」を以下に述べておく。

**How to Figure out the Morphological Type of verb from its
Dictionary Form (or Nonpast Plain Form)**

< 適用順も羅列順に従って。形態種がきまったらそこで適用を止める >

1. Rule1: If verb in the nonpast plain form ends with either /kuru/ with the meaning of 'come' or /suru/ with the meaning of 'do', then it is the irregular verb as is. Its verb base is either /k/ 'come' or /s/ 'do'.^{*10,*11}
2. Rule 2: Otherwise, if it ends with *neither* /-iru/ *nor* /-eru/, then the verb is a consonant ending verb. Its verb base ends with a consonant like /yom/ 'read'. (たいていの動詞が、/-iru/でも/-eru/でも終わらない子音終末語幹動詞であり、これはとても役立つ)。^{*12}
3. Rule 3: If it ends with either /-iru/ or /-eru/, then it is *either* a vowel ending verb like /miru/ 'see' and /kaeru/ 'change' *or* a consonant ending verb like /hashiru/ 'run' and /kaeru/ 'return' and /yomu/ 'read'. (非過去形が/-iru/か、あるいは、/eru/で終わる子音終末語幹動詞の数は、母音終末語幹動詞の数よりずっと少ない。非過去形が/-iru/か、あるいは、/eru/で終わる子音終末語幹動詞は、例えば、「走る」(語幹/hashir/)「帰る；返る；帰る」(語幹/kaer/)「知る」(語幹/shir/)「入る」(語幹/(ha)ir/)「要る；炒る」(語幹/ir/)「切る」(語幹/kir/)である。)

3.2 [練習問題]

[問題] (78) 中のそれぞれを標準語の動詞の現在形だと仮定する。動詞の形態種を算出する規則「How to Figure out the Morphological Type of verb from its Dictionary Form」

^{*10} ひとつの漢語音 + /s/ を第 2 言語習得の初期の段階で学ぶことは、ないから、本文のとおりで問題は生じない。厳密にしようと思えば、以下の規則 A を本文のこの条件の前に適用しなければならない。Rule A: If verb in the nonpast plain form ends with /suru/ or /su/ with the meaning of 'do' and the rest is the sound of one Chinese character, then it is a consonant verb base verb. Its verb base is /...s/, which is as far as either the last /u/ eliminated for /...su/ or the last /uru/ eliminated for /...suru/.

^{*11} ここで /kuru/ 'come' や /suru/ 'do' における意味の条件を入れているのは、「繰る /kuru/」や「刷る /suru/」は子音終末語幹動詞であり、これらを正しく予測するには、意味的な制約を使うしかないからである。

^{*12} 例えば、/toru/ や /uru/ や /karu/ は、これから、それぞれ子音終末語幹動詞であることを予測できる。また、この予測は正しい。

だけを使って、それぞれの動詞がどの形態種に属するか、可能な限り、算出しなさい。また、それぞれの否定形を書きなさい。答えは例のように書く。算出の仕方は、例の動詞の現在形「はばける /habakeru/」の算出(128)と、動詞の現在形「する /suru/」の算出(80)を参考にする。

- (78) a. 例1) はばける /habakeru/
 形態種：[i) 子音終末語幹動詞、あるいは、ii) 母音終末語幹動詞]
 否定形：[i) の場合：「はばけられない」、ii) の場合：「はばけない」]
- b. 例2) する /suru/
 形態種：[i) 強変化動詞、ii) 子音終末語幹動詞]
 否定形：[i) の場合：「しない」、ii) の場合：「すらない」]
- c. いわたる /iwataru/
 形態種：[]
 否定形：[]
- d. うごもる /ugomoru/
 形態種：[]
 否定形：[]
- e. ひる /hiru/
 形態種：[]
 否定形：[]
- f. あかつ /akatsu/
 形態種：[]
 否定形：[]
- g. さらくる /sarakuru/
 形態種：[]
 否定形：[]
- h. げきする /gekisuru/
 形態種：[]
 否定形：[]
- i. はらう /harau/
 形態種：[]
 否定形：[]

- (79) 「はばける /habakeru/」は、「do」の意味を持つ「する」でも「す」でも終わっていないので、一漢語音/s/の子音終末動詞ではない(脚注*10の規則Aの適用)。「はばける /habakeru/」は、「do」の意味を持つ「する」でも、「come」の意味を持つ「くる」

でも、終わっていないので、強変化動詞ではない(規則1の適用)。/iru/でも/eru/でも終わっていないというのが規則2の適用の条件で、これは、/eru/で終わっているので、規則2は適用されない。次の規則は、/iru/か/eru/かで終わっているというのが条件だから、これが適用される。もし、/iru/か/eru/かで終わっていれば、それは、子音終末語幹動詞か、母音終末語幹動詞かである(規則3)から、この動詞は、/eru/で終わっており、子音終末語幹動詞か、母音終末語幹動詞である。(留学生は、実際は、その辞書形が/iru/か/eru/かで終わる子音終末語幹動詞を覚えていなければならない。その数は数十個である。)もし、子音終末語幹動詞であれば、例えば、その否定形は、「はばけられない」であり、もし、母音終末語幹動詞であれば、例えば、その否定形は、「はばけない」である。他の可能性はない。

(80) 「する /suru/」は、「do」の意味を持つ「する」で終わっているが、一漢語音がある前になから、一漢語音/s/の子音終末動詞ではない(脚注*10の規則Aの適用)。「する /suru/」は、「do」の意味を持つ「する」か、「come」の意味を持つ「くる」で終わっているとも考えられる。「do」の意味を持つ場合とその意味を持たない場合で、場合わけして考える。

- 1) 「do」の意味を持つ場合：規則1から強変化動詞である。よって、例えば、その否定形は、「しない」である。
- 2) 「do」の意味を持たない場合：規則1から強変化動詞ではない。規則2より、/iru/でも/eru/でも終わっていないので、これは子音終末語幹動詞である。よって、その否定形は、「すらない」である。

他の可能性はない。

3.3 佐賀西部方言の動詞と時制の形態

では、この節では、佐賀西部方言の動詞と時制の形態を見る。付録Bに、日本語学習教材の日本語初級の教科書に出てくる動詞265個について、その現在形と過去形、そして、それに形態上、対応する佐賀西部方言の動詞の現在形と過去形を羅列した。その表を見て、佐賀西部方言の動詞の形態と時制と標準語の対応についてどのような規則性があるかを自分で、議論しながら、発見しよう。読者がこの議論・発見が終わったとして、まとめると、佐賀西部方言と標準語では、語彙自体が異なること(例えば、標準語の「ふざける」は、佐賀西部方言では、「ひょうぐっ」「ひょうげる」と言う)を除けば、以下の9点が異なるだけである：

- 子音終末語幹動詞について
 - － /w/終末の場合：過去形
 - － /r/終末の場合：現在形(長音 [:])

- 1 漢語音-/s/終末の場合：現在形（促音 [ʔ]）
- 母音終末語幹動詞について
 - 子音-/e/で終わる/e/母音終末の場合：現在形（促音 [ʔ]）
 - 母音-/e/で終わる/e/母音終末の場合：現在形（促音 [ʔ]）
 - /i/母音終末の場合：現在形（長音 [:]）
- 強変化動詞/k/ ‘come’ の場合：現在形（促音 [ʔ]）
- 強変化動詞/s/ ‘do’ の場合：現在形（促音 [ʔ]）

ここでは、佐賀西部方言の/w/終末語幹動詞の過去形は標準語とは異なるが、それについてはここでは触れない。^{*13} そのほかの違いはすべて現在形の違いである。では、これらの現在形の違いについてもっと詳しく見てみよう。

現在形の違いは2種類ある。対応する佐賀西部方言の動詞において促音 [ʔ] が生起しているものと、長音 [:] が生起しているものがある。まず、促音に関係するものから詳しく見てみよう。佐賀西部方言の母音/e/終末語幹の動詞の現在形は、表 3.1 にあるように、標準語の終末の [e-ru] を [uʔ] に換えたものである。^{*14}

表 3.1 /e/母音終末の現在形

| 佐賀西部方言 | 標準語 |
|---------|--------------------|
| ...uʔ | ...[Consonant]e-ru |
| yasuʔ | yase-ru |
| nuʔ | ne-ru |
| zuʔ | de-ru |
| wasuruʔ | wasure-ru |

なお、表 3.1 の場合は、終末母音/e/の直前は、たとえば、/yase-ru/における/s/のように、子音である。標準語の語幹の終末の母音/e/の直前が母音のときは、表 3.2 の前半部分のように、母音/e/の直前が子音のときとは少し違って、標準語の終末の [e-ru] を [yuʔ] に換えたものである。

実は、標準語において、たとえば、/kaeru/に対して/kayeru/のように、母音の連りの間に/y/があると考え、その/ye/が実際には/e/と発音されるとすれば、表 3.1 の場合、子音と/e/が連なるときと同様に、標準語の終末の [e-ru] を [uʔ] に換えたものであると考えることができる。母音/e/終末語幹動詞の現在形は、さらに深くすぐ後に分析される。

^{*13} 付録 B にあるように、例えば、標準語「会（あ）った」の佐賀西部方言は「おーた (/aw-ta/ → [o:ta])」で、この音声変化は、英語では saw が [so:] と発音されることとも似ており、かなり普遍的な現象であると考えられる。

^{*14} 標準語「出（で）る」の佐賀西部方言の動詞が「ずっ」であるのは、日本語では/du/が/zu/と発音されることから説明される。

表 3.2 母音-/e/母音終末の現在形

| 佐賀西部方言 | 標準語 |
|--------|--------------------|
| ...yu? | ...[Vowel]e-ru |
| kayu? | kae-ru |
| miyu? | mie-ru |
| ...u? | ...[Consonant]e-ru |
| kayu? | /kaye-ru/ [kaeru] |
| miyu? | /miye-ru/ [mieru] |

佐賀西部方言の1漢語音/s/子音終末語幹動詞、強変化動詞の現在形は、表 3.3 にあるように、標準語の終末の [u-ru] を [u?] に換えたものである。

表 3.3 1漢語音/s/子音終末語幹動詞と強変化動詞の現在形

| 佐賀西部方言 | 標準語 |
|-------------|---------------|
| ... u ? | ... u ru |
| 愛 s u ? | 愛 s u ru |
| 愛 s u | 愛 s u |
| 略 s u ? | 略 s u ru |
| 略 s u | 略 s u |
| 研究 s u ? | 研究 s u ru |
| 来 ? [k u ?] | 来 ru [k u ru] |

3.1 節の 58～59 ページで議論したように、1漢語音/s/の現在形が短形（例、「愛す」[aisu]）と長形（例、「愛する」[aisuru]）があり、どちらも現在形であることから、長形では非過去形態の/u/、さらに、非過去形態/ru/が連続していると分析した。そして、この分析を強変化動詞の現在形についても同じように分析した。そして、不思議なことに、佐賀西部方言においては、標準語のこれら3種類の動詞の現在形の連続した現在形形態の2番目の代わりに、促音?が生起している。

ここで、前の段落で触れた母音/e/終末語幹動詞の現在形が実は、福岡の柳川方言や古典語でそうであるように、語幹終末の/e/が/u/であると仮定することで、佐賀西部方言においては、標準語あるいは仮定語のこれら4種類の動詞の現在形の連続した現在形形態の2番目の代わりに、促音?が生起するという分析により、佐賀西部方言の動詞の現在形の促音現象を一気に説明できる。

表 3.4 /e/母音終末の現在形

| 佐賀西部方言の関連動詞 | 佐賀西部方言 | 標準語 |
|-------------|---------|-------------------|
| ...u ru | ...u ? | ...e ru |
| yas u ru | yasu? | yase-ru |
| n u ru | nu? | ne-ru |
| z u ru | zu? | de-ru |
| wasur u ru | wasuru? | wasure-ru |
| kay u ru | kayu? | /kaye-ru/ [kaeru] |
| miy u ru | miyu? | /miye-ru/ [mieru] |

次に、長音に関係するものを見てみよう。佐賀西部方言の母音/e/終末語幹の動詞の現在形以外の場合、表 3.5 にあるように、標準語の終末の [r#u] か [#ru] を直前の母音を長音化したものに換えたものである。

表 3.5 /e/母音終末の現在形

| 佐賀西部方言 | 標準語 |
|-----------------------|------------------------------|
| ...[V ₁]: | ...[V ₁](#)r(#)u |
| a: | ar u |
| ha: | har u |
| ki: | kir u |
| u: | ur u |
| e: | er u |
| o: | or u |
| oki : | oki ru |
| ki : | ki ru |

佐賀西部方言の促音現象は、標準語の非過去形態が連続する場合で、形態の境界に敏感に対応して生起しているが、一方、長音現象は、標準語/i ru/ ‘exist-Nonpast’ に対しても、標準語/ir u/ ‘is needed’ に対しても生起しているように、形態の境界には無頓着である。これらから長音現象がより音声のより終わり局面で起こっていると考えられる。

3.4 佐賀西部方言の文法 # 3

2.5 節で、佐賀西部方言の文法 # 2 (68 ページの図 2.1 中) を格形式の概念を中心に創ったが、この節では、文法 # 2 を、時制の概念を取り入れて、文法 # 3 のように発展させる。新しい文法では、「文」、つまり、文法が、正しく形式立っているものとして受け入れ、それに統語構造を与える語列は、時制の付いた節 (TCl: tensed clause) であると定義される (Rule 0)。例えば、節 (Cl) と過去時制 (Past) がこの順で列を成せば、その列は、時制付き節 (TCl) と分析される (Rule 1)。前の節までは /u/ と /ru/ を非過去の形態と呼んでいたが、1 漢語音 /s/ の子音終末語幹動詞、いわゆる「母音 /e/」終末語幹動詞、強変化動詞において、これらの形態が連続することから、これらの形態を非過去よりむしろ時制の暫定形態 (Default Form of Tense: DfltFT) とする方がより意味を成すと考えられ、本著では、この考えを採用する。さらに、時制の意味が定まっていない時制付き節は、非過去時制と解釈されると仮定する。Rule 30 から Rule 33 までにあるように、/u/ と /ru/ は時制の暫定形態 (DfltFT) であるとし、/ita/ と /ta/ とを過去時制 (Past) であるとする。例えば、節 (Cl) と時制の暫定形態 (DfltFT) とがこの順に列を成せば、その列は、時制暫定形節 (DTCl) と分析され (Rule 3)、加えて、時制暫定形節 (DTCl) も、時制付き節 (TCl) と分析される (Rule 2)。Rule 4 は、時制暫定形節 (DTCL) と、さらに、時制の暫定形態 (DfltFT) とがこの順で列をなせば、時制暫定形節 (DTCl) と分析されるとしている。

- Rule 0: initial symbol: **TCI**
Rule 1: **TCI** → **CI Past**
Rule 2: **TCI** → **DTCI**
Rule 3: **DTCI** → **CI DftFT**
Rule 4: **DTCI** → **DTCI DftFT**
Rule 5: **CI** → **NOMP VI**
Rule 6: **CI** → **NOMP VP**
Rule 7: **VP** → **ACCP VT**
Rule 8: **NOMP** → **N NOM1**
Rule 9: **NOMP** → **N NOM2**
Rule 10: **ACCP** → **N ACC**
Rule 11: **VI** → **nak**
Rule 12: **VI** → **n %neru**
Rule 13: **VI** → **ne %neru**
Rule 14: **VI** → **hukur %hukureru**
Rule 15: **VI** → **hukure %hukureru**
Rule 16: **VI** → **miy %mieru**
Rule 17: **VI** → **mie %mieru**
Rule 18: **VI** → **odorok**

図 3.2 佐賀西部方言の文法 # 3 (続く)

文法 # 2 で動詞を提示した際には、時制を含んだ形を動詞としていたが、この新しい文法では、すべて、時制の形態を除いた形態、つまり、語幹が動詞とされる (Rule 11 から Rule 26 まで)。ここで、いわゆる「母音/e/終末語幹動詞」については、語幹を二つ仮定する：例えば、「食べる」については、*tabe* と *tab* が語幹であり (前者に Rule 21、後者に Rule 22)、前者が、過去形のときに使われ、後者が「現在形」、つまり、時制暫定形節で使われる。「母音/e/終末語幹動詞」の「寝る；ぬっ」に関しては、/ne/と/n/を仮定し、「膨れる；ふくるっ」に関しては、/hukure/と/hukur/を仮定し、「食べる；食ぶっ」に関しては、/tabe/と/tab/を仮定する。「母音/e/終末語幹動詞」で、語幹末の/e/の前が母音の動詞、例えば、「見える；見ゆっ」に関しては、/mie/(/miye/としてもよい) と/miy/を仮定する。

- Rule 19: VT → **kir** %‘cut’
 Rule 20: VT → **ki** %‘wear’
 Rule 21: VT → **tab** %taberu
 Rule 22: VT → **tabe** %taberu
 Rule 23: VT → **kuw**
 Rule 24: VT → **odorokas**
 Rule 25: VT → **ais**
 Rule 26: VT → **kenkyuus**
 Rule 27: NOM1 → no
 Rule 28: NOM2 → ga
 Rule 29: ACC → ba %(w)o
Rule 30: DfltFT → u
Rule 31: DfltFT → ru
Rule 32: Past → ita
Rule 33: Past → ta
 Rule 34: N → hebi
 Rule 35: N → agemaki
 Rule 36: N → kodon %kodomo
 Rule 37: N → meshi %gohan
 Rule 38: N → **kimon** %kimono
 Rule 39: N → heya

Phonology:

Rule 40: u ru ^{assoc} u ?, where /u/ and /ru/ are DfltFT.

Rule 41: [V_i](#)r(#)u ^{assoc} [V_i](#):

図 3.3 佐賀西部方言の文法 # 3 (続き)

ボールド書体の部分は新しい部分である。Rule 40 と Rule 41 とは、音韻論に係る規則である。時制の暫定形態である /u/ と /ru/ とが連続して生起する形態は、最後の /ru/ を声門閉鎖音 ? に置き換えた形態と関連づけられる (Rule 40)。/ru/ で終わる動詞の現在形は、その前の母音を長音化したものと関連付けられる (Rule 41)。ここで、音声のより末端部分である音韻関係の規則がより後で適用されると仮定し、Rule 40 が Rule 41 より先に適用される。^{*15}

^{*15} この音韻論に関する規則に関しては、さらに探求し、より普遍的で簡素な規則を発見できると思われるが、本著の目的を超え、ここでは触れない。関心ある読者は、言語学の音韻論、形態論、統語論、形式意味論を学ばれたらいいだろう。

佐賀西部方言の文法 # 3、図 3.2、3.3 で提案された文法、は、例えば、音の列 (81) (= (44)) /kodon no nu?/ に関して、以下に述べるような予測を産む。

- (81) kodon no nu? [= ne-ru]
 child Nom sleep[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will sleep.’

この音列の最後の部分の [nu?] は、例えば形態境界を (82a) のように入れて解釈されることができ、また、そうされたと仮定しよう。すると、音韻規則 4 0 はこの音の列 (82a) を、その最後の /u/ と /ru/ を時制暫定形態と特定した音の列 (82b) に関連付ける。

- (82) a. kodon no n u ?
 b. kodon no n u ru
 DftFT DftFT

なお、ここで、音列 (81) 中の音列 [nu?] が /nur u/ に関係付けられる可能性はない。なぜなら、/nur u/ においては、語末から二つ目の /u/ はひとつの形態ではなく、それをひとつの形態、時制暫定形態 /u/ と特定できない。このため、(83a) ~ (83b) のように、音韻規則 4 1 が働き、/nur u/ は [nu:] に関連付けられてしまうからである。また、/n#u#?/ 以外の形態境界の挿入はありえない。

- (83) a. kodon no nu:
 b. kodon no nur u

佐賀西部方言の文法 # 3 は、音の列 (82b) を図 3.4 のように分析し、その列が時制付きの節であると予測する。

こうして、この時制付きの節の時制は、特定の意味が与えられてないため、このセクションの冒頭に述べた仮定により、非過去であると解釈される。このようにして、佐賀西部方言の文法 # 3 は、この音列 [kodon no nu?] が ‘some child will sleep’ の意味を持つと正しく予測する。

同様にして、佐賀西部方言 # 3 は、例えば、1 漢語音 /s/ の動詞を含む列 [kodon no agemaki ba aisū] や [kodon no kimon ba aisū?] を正しく予測できる。

佐賀西部方言の文法 # 3、図 3.2 と図 3.3 において提案された文法、は、例えば、音の列 (84) /kodon no kimon ba ki:/ に関して、以下に述べるような予測を産む。なお、この音列の意味はふたつの意味で曖昧である：ひとつの意味は、‘children will wear clothes’ で、もう一つの意味は、‘children will cut clothes’ である。

- (84) kodon no kimon ba ki: [= kiru]
 child Nom clothese Acc wear/cut[Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘Children will wear or cut clothes.’

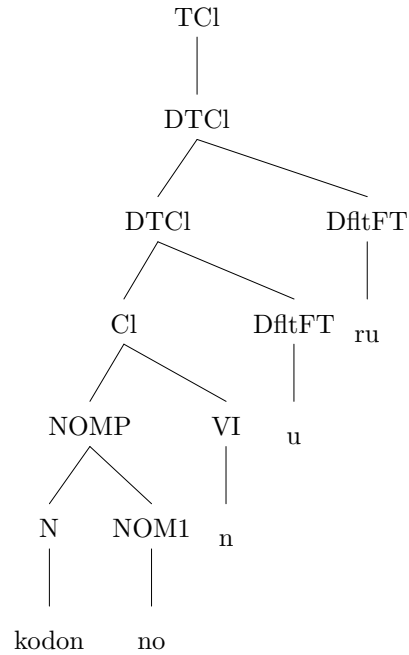


図 3.4 佐賀西部方言の文法 # 3 による音の列 ‘kodon no n u r u’ の分析

この音列の最後の部分の /ki:/ の形態境界の挿入は、(85a) /ki#:#/ と (86a) /ki:#/ とのふたつが可能である。解釈 (85a) /ki#:#/ の場合は、音韻規則 4 1 は、これを、/ki/ と /ru/ を形態と特定した音の列 (85b) に関連付ける。

- (85) a. kodon no kimon ba ki :
 b. kodon no kimon ba ki ru

解釈 (86a) /ki:#/ の場合は、音韻規則 4 1 は、これを、/kir/ と /u/ を形態と特定した音の列 (86b) に関連付ける。

- (86) a. kodon no kimon ba ki:
 b. kodon no kimon ba kir u

佐賀西部方言の文法 # 3 は、音の列 (85b) と音の列 (86b) とのそれぞれを図 3.5 のように分析し、その列が時制付きの節であると予測する。

ここで、/kir/ は子音終末語幹動詞で、その否定現在形は「きらない」で、つまり、「切らない」で、この語列 /kir/ の意味は ‘cut’ で、/ki/ は母音終末語幹動詞で、その否定現在形は「きない」で、つまり、「着ない」で、この語列 /ki/ の意味は ‘wear’ である。このように

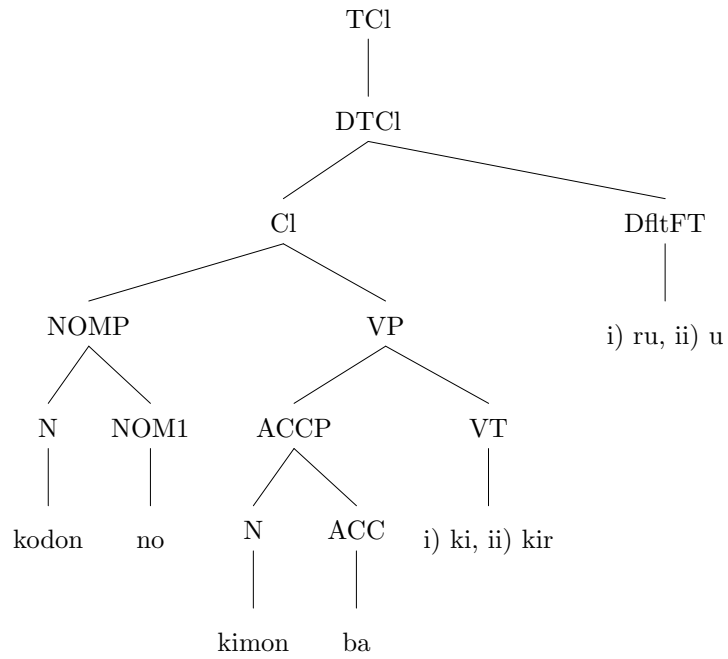


図 3.5 佐賀西部方言の文法 # 3 による音の列 'kodon no kimon ba kir u/ki ru' の分析

して、佐賀西部方言の文法 # 3 は、この音列 [kodon no kimon ba ki:] が 'some child will wear clothes' あるいは 'some child will cut clothes' の意味を持つと正しく予測する。

参考文献

- Abusch, Dorit. 2004. "On the temporal composition of infinitives," in Gueron, Jacqueline, and Jacqueline Lecarme, *The syntax of time*, 27-53. Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the theory of syntax*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Georgia, Green M, and Jerry L Morgan. 1996. *Practical guide for syntactic analysis*. Stanford: CSLI
- Gunji, Takao. 1987. *Japanese phrase structure grammar: a unification-based approach*. Dordrecht: D. Reidel
- Gunji, Takao, and Koiti Hasida. 1998. "Measurement and quantification," in Gunji, Takao, and Koiti Hasida, *Topics in Constraint-based Grammar of Japanese*, 39-79. Dordrecht: Kluwer.
- Hale, Kenneth. 1982. "Preliminary remarks on non-configurationality." *Proceedings of the North Eastern Linguistic Society*, 12, 86-96
- Karttunen, Lauri. 1989. "Radical lexicalism," in Baltin, Mark R., and Anthony S. Kroch, (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 43-65. Chicago: University of Chicago Press.
- Koga, Hiroki. 2000. *A grammar of case: the nominative form, but a semantic filler*. PhD dissertation at University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Montague, Richard. 1973. "The proper treatment of quantification in ordinary English," in Jaakko Hintikka, Julius Moravcsik and Patrick Suppes (eds.), *Approaches to Natural Language: Proceedings of the 1970 Stanford Workshop on Grammar and Semantics*, 221-42. Dordrecht: D. Reidel.
- Montague, Richard 1997. "Universal grammar." *Theoria*, 36: 373-98.
- Parsons, Terence. 1990. *Events in the semantics of English: a study in subatomic sentences*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press
- Pollard, Carl, and Ivan A Sag 1994. *Head-driven phrase structure grammar*. Chicago, IL: CSLI, University of Chicago Press

-
- Popper, Karl R. 1968. *The logic of scientific discovery*, 2nd ed. New York: Harper and Row
- Sag, Ivan A. 1997. "English relative clause constructions." *Journal of Linguistics*, 33: 2, 431-84

付録 A

議論のために：言語（文）にある原理や規則を自分で発見する

言語学（科学）の面白さは、「現象の裏に隠れている」原理や規則を自分で発見することにある。いくつかの現象を深く、さらに、深く探査して、その原理や規則を見つけ、その原理や規則が、「一筋縄で」、かつ、ドミノ倒しのように、より多くの現象を一気に説明できたときは興奮する。この科学の面白さを知るには、データを見て、自分で原理や規則を見つける訓練をするしかない。ここでは、各章の本文に入る前に、受講者がグループでこの訓練ができるように配慮した。本文に入る前に議論する時間を持ったら、本文における学習がかなり円滑に進むであろう。

A.1 第1章4節の「格形式：主格」の前に

[議論1] 佐賀西部方言では標準語の主格形式「が」に当たるものが何かを考えなさい。佐賀西部方言の母語話者に、標準語の(87b)の意味を伝えるには、佐賀西部方言では(87a)中のXXに何を挿入して言えばいいかを質問して答えを考えよう。

- (87) a. akachan XXX oki: gii, ...
 baby Nom get up[Nonpast] if, ...
 ‘[佐賀西部方言] If the baby wakes up, ...’
- b. akachan ga okiru to, ...
 baby Nom get-up[Nonpast] if, ...
 ‘If the baby wakes up, ...’

同様に、佐賀西部方言の母語話者に、標準語の(88b)の意味を伝えるには、佐賀西部方言では(88a)中のXXに何を挿入して言えばいいかを質問して答えを考えよう。

- (88) a. akachan XXX kashikoka gii, ...
 baby Nom is-clever[Nonpast] if, ...
 ‘[佐賀西部方言] If the baby is clever, ...’
- b. akachan ga kashikoi to, ...
 baby Nom is-clever[Nonpast] if, ...
 ‘If the baby is clever, ...’

[議論 2] 標準語では形容詞-繫辞が述語の時にはその目的語や主語の名詞は直後に主格の形式「が」が付随することで示されるが、佐賀西部方言ではどうだろうか。標準語の(89b)という意味を伝えるために、佐賀西部方言の文(89b)で、標準語の主格に対応する XXX の部分に何をいれるかを考えることで答えを考えよう。

- (89) a. dai XXX doganden mizu XXX hoshika?
 who Nom very much water Nom want[Nonpast]
 ‘[佐賀西部方言] Who wants water very much?’
- b. dare ga totemo mizu ga hoshii?
 who Nom very much water Nom want[Nonpast]
 ‘Who wants water very much?’

[議論 3] 佐賀西部方言では標準語の主格形式「が」に当たるものが何かを考えたが、例えば、条件節の中の文 /akachan XXX oki:/ について、その3つの語 { akachan, XXX, oki: } について特定の語順があるか調べなさい。

A.2 第2章第2節の「主格、対格」の前に

[背景] 第2章2節で、いかなる文であっても、文の中心的な意味を成す動詞が出来事（状態や行為）を描写することを知り、出来事の意味的な役割として「主題 (theme)」、 「行為者 (actor)」、 「被害者 (undergoer)」があり、かつ、主格の名詞がどの意味役割を描写するか、目的格の名詞がどの意味役割を描写するかを学んだ。それでは、ここで、佐賀西部方言ではどのような性質を持つ名詞がどの意味役割を描写するかを調べてみよう。

[議論 1] 文(90a) 文(90b) 文(90c) では、それぞれ、形容詞あるいは名詞-繫辞が主動詞で状態 (state) を描写しているが、それぞれの文において、その主題 (theme) を、どのような特徴を持つ名詞が描写しているかを考えよう。

- (90) a. pecha no omoshirokatta.
menko-game ? is-interesting[past]
'The pecha game was interesting.'
- b. akachan ga genki-katta. [= datta]
baby ? energetic-be[Perf] [stndrd Jpns]
'The baby was fine/healthy.'
- c. agemaki wa koobutsu-yatta. [= datta]
clam ? like-be[Perf] [stndrd Jpns]
'Talking about the jackknife clams, they were my favorite.'

また、それぞれの文において、同じ名詞を使って、どのような特徴を持つ名詞がその代わりに状態の主題を描写できるか考えよう。また、その特徴によって意味の違いがあるかどうかを考えよう。

[議論2] 文(91a) 文(91b) 文(91c)では、それぞれ、繫辞ではない動詞が主動詞で行為(action)を描写しているが、どのような特徴を持つ名詞が、どの意味役割を描写していると考えれば、これらのデータを説明できるか考えよう。

- (91) a. ie no taoru?. [= taore-ru]
house ? fall-down[Nonpast] [stndrd Jpns]
'The house will fall down.'
- b. yako ga nee kodon ba damash-ita.
fox ? ? child ? deceive-Nonpast
'A fox deceived the child.'
- c. karameshi ba onjisan no kuw-as-u.
rice-only ? uncle ? eat-Honorific-Nonpast
'The uncle ate rice only.'

[議論3] 文(92a) 文(92a) 文(92a)はどれも「高菜漬けを食べよう」という意味であるが、それぞれ、どのような特徴を持つ名詞が、意味役割「被害者(undergoer)」を描写しているか考えよう。

- (92) a. okomoji ba kuw-oi.
pickled takana Acc eat-let's
'Let's eat pickled takana.'

- b. okomoji kuw-oi.
 pickled takana eat-let's
 ‘Let’s eat pickled takana.’
- c. okomoji don kuw-oi.
 pickled takana XX eat-let's
 ‘Let’s eat pickled takana, for example.’

そして、3つの特徴をどれも対格と考えることができるかどうかを考えよう。

A.3 第3章「動詞と時制の形態」の前に

[議論 1 a] <日本語標準語> 日本語標準語の6個の動詞の丁寧形の現在形と過去形、非丁寧形の現在形と過去形と否定形が与えられているが、これらを見て、これらをどのように形態上、分類し、何を動詞の原形（語幹）とし、何を丁寧形態とし、何を現在形態とし、何を過去形態としたら、いいかを考えよう。

- (93) a. hanasimasu
 talk [Polite] [Nonpast]
- b. hanasimasita
 talk [Polite] [Past]
- c. hanasu
 talk [Nonpast]
- d. hanasita
 talk [Past]
- e. hanasanai
 talk not
- (94) a. tsukurimasu
 make [Polite] [Nonpast]
- b. tsukurimasita
 make [Polite] [Past]
- c. tsukuru
 make [Nonpast]

d. tsukutta cf. tsukuritari [Classical Japanese]
make [Past]

e. tsukuranai
make not

(95) a. tabemasu
eat [Polite] [Nonpast]

b. tabemasita
eat [Polite] [Past]

c. taberu
eat [Nonpast]

d. tabeta
eat [Past]

e. tabenai
eat not

(96) a. okimasu
get-up [Polite] [Nonpast]

b. okimasita
get up [Polite] [Past]

c. okiru
get up [Nonpast]

d. okita
get up [Past]

e. okinai
get up not

(97) a. mottekimasu
bring [Polite] [Nonpast]

b. mottekimasita
bring [Polite] [Past]

c. mottekuru
bring [Nonpast]

d. mottekita
bring [Past]

e. mottekonai
bring not

- (98) a. kenkyuusimasu
research [Polite] [Nonpast]
- b. kenkyuusimasita
research [Polite] [Past]
- c. kenkyuusuru
research [Nonpast]
- d. kenkyuusita
research [Past]
- e. kenkyuusinai
research not

[議論 1 b] <日本語標準語> 現在形が「う」で終わる動詞、例えば、「会う」、「言う」、「思う」、「食う」、「払う」は、議論 1 で考えた分類のどれに属すると考えられるか。また、何を動詞の原形（語幹）と考えるといいだろうか。

- (99) a. aimasu
meet [Polite] [Nonpast]
- b. aimasita
meet [Polite] [Past]
- c. au
meet [Nonpast]
- d. atta cf. aw itari
meet [Past]
- e. awanai
meet not

現在形が「く」で終わる動詞「行く」、「聞く」は、それぞれ、議論 1 で考えた分類のどれに属すると考えられるか。また、どちらをその形態種の典型と考えたらいいだろうか。つまり、どちらを例外と見なしたらいいだろうか。

- (100) a. ikimasu
go [Polite] [Nonpast]
- b. ikimasita
go [Polite] [Past]

- c. iku
go Nonpast
- d. * iita cf. ikitari
go [Past]
- e. itta
go [Past]
- f. ikanai
go not

- (101) a. kikimasu
listen [Polite] [Nonpast]
- b. kikimasita
listen [Polite] [Past]
 - c. kiku
listen Nonpast
 - d. kiita cf. ikitari
listen [Past]
 - e. * kitta
listen [Past]
 - f. kikanai
listen not

[議論 1 c] <日本語標準語> 動詞の現在形「要る」と「居る」とは、現在形が同じだが、その他の場合は異なることがある。また、同様に、動詞の現在形「帰る」と「変える」とは、現在形が同じだが、その他の場合は異なることがある。このような違いをどのように説明すれば言いか考えよう。

- (102) a. iru
be Nonpast
- b. inai
be not
 - c. ita
be [Past]
- (103) a. iru
need Nonpast

- b. iranai
need not
- c. itta
need [Past]
- (104) a. kaeru
change [Nonpast]
- b. kaenai
change not
- c. kaeta
change [Past]
- (105) a. kaeru
go home [Nonpast]
- b. kaeranai
go home not
- c. kaetta
go home [Past]

[議論 1 d] <日本語標準語> 動詞「愛する」、「制する」、「略する」というひとつの漢語と「する」からなる動詞は、それぞれ、議論 1 で考えた分類のどれに属すると考えられるか。また、何を動詞の原形と考えたらいいだろうか。

- (106) a. aisimasu
love [Polite] [Nonpast]
- b. aisimasita
love [Polite] [Past]
- c. aisuru [長形]
love [Nonpast]
- d. aisuru [短形] [古典語の響きがある]
love [Nonpast]
- e. aisita
love [Past]
- f. aisana
love not

[議論2] <佐賀西部方言の動詞> 付録に、標準語の動詞の現在形と過去形に対応する佐賀西部方言の動詞の現在形と過去形があるので、それを使って、佐賀西部方言の動詞の現在形や過去形は、標準語と同じかどうかを調べよう。違うのであったら、どう違うか調べよう。

付録 B

佐賀西部方言の 265 個の動詞の現在形と過去形のリスト

付録 C

佐賀西部方言での会話

ここに現代佐賀西部方言の母語話者の会話をふたつ記録した。最初の会話は、筆者（芦刈町出身で、高校卒業まで滞在し、その後は東京、アメリカ、大阪に住み、標準語を使用して、帰省時や親族と話すときは同方言を使っている）と佐賀大学大学院生の江頭英俊君（江北町出身で、高校卒業まで滞在し、その後は佐賀市に滞在し佐賀市の方言を使用し、帰省時や親族と話すときは同方言を使っている）との会話である。

C.1 有明海での魚獲り

ふたりは子供のときに有明海でどんな魚獲りをしていたかを話している。会話中の‘K:’は筆者が話した部分で、‘E:’は江頭君が話した部分である。

- (107) K: chiisaka koro ne, ariakekai sai itta.
 small time-about AdQ, the-Ariake-sea to went
 ‘Did you go to the Ariake sea when (you were) small? (小さい頃 ね、 有明海 へ 行った?)’
- (108) E: itta. itta
 went went
 ‘(I) went (there). (行った。行った)’
- (109) K: oi nee, kekko ne, toochan to issho-ni ne, mutsu to ka
 I AdQ, often AdQ, Dad with together AdQ, kind-of-fish Comp Q
 totta yo
 took Emph
 ‘I took, for example, Mutsu(goro), together with my dad. (俺ねえ 結構ねえ 父 ちゃんと 一緒にねえ むつとか 獲ったよ。)’

- (110) E: haa, oi ne, tsurishi gya ikiyotta.
 hun, I AdQ, fishing to were-going
 ‘(I) was going there to fish. (はあ、俺はねえ 釣りしに 行ってた。)’
- (111) K: nan ba tsutta
 what Acc fished
 ‘What did (you) fish (there)? (何を釣った?)’
- (112) E: subo to-ka
 Kind-of-fish Comp-Q
 ‘Warasubo, etc. (スボとか。)’
- (113) K: warasubo ya.
 kind-of-fish Copula
 ‘Is (that) Warasubo? (ワラスボですか。)’
- (114) E: un. ato, bora.
 yes. rest, kind-of-fish.
 ‘Yeah. In addition, (I was fishing) Bora (there). (うん。あと、ぼら(魚の名))’
- (115) K: bora tte, raigyo no koto ya.
 kind-of-fish Comp, kind-of-fish Copula thing Copula
 ‘(You are saying) that (what you were fishing was) Bora, is that the fish named
 ‘raigyo’? (ボラとは、雷魚のことですか。)’
- (116) E: bora, sakana, sakana, ba tsuiyotta. ato wa, nan kya na, ...
 Bora, fish, fish, Acc was-fishing. rest Top, what Q Emphatic, ...
 ‘I was fishing Bora, or (a kind of) fish, fish. In addition, what (was I fishing there?)
 (ボラ、魚、を釣っていた。あとは、何ですかねえ・・・)’
- (117) K: jinkichi no tanbo no tokoro de toru? ne?, iya, tsuru? ne
 kind-of-fish Nom rice-field Gen place in take-can AdQ, no, fish-can AdQ
 ‘Can you catch, or fish, jinkichi in rice fields? (ジンキチ(ワラスボと同じ)が田んぼ
 のところで獲れる? いや、釣れる?)’
- (118) E: iya:, tsuren, tsuren, tsuren.
 No, fish-cannot, fish-cannot, fish-cannot
 ‘No, (we) cannot fish it in rice fields. (いや、釣れない。釣れない。)’

- (119) K: jaa, ariakekai made itte?
 then, the-Ariake-sea as-far-as going-with?
 ‘If that is the case, then (were you) going as far as the Ariake sea and (fishing there)?
 (じゃあ、有明海まで行って(釣った)?)’
- (120) E: itte, tsuiyotta.
 going-with, was-fishing
 ‘(I) was fishing going (there). (有明海まで行って釣っていた。)’
- (121) K: ariakekai no, ... ano teiboo no toko kara ya?
 the-Ariake-sea Gen, ... that bank Gen place from Copula
 ‘(Were you fishing) from that bank of the Ariake sea? (有明海の、あの堤防のところからですか。)’
- (122) E: teiboo no tokoro kara nagete, tsuiyotta.
 bank Gen place from throwing-with, (I) was fishing?
 ‘I was fishing, throwing the fishing string from the bank. (堤防のところから投げて釣っていた。)’
- (123) K: riiru ba tsukoote?
 reel Acc using-with?
 ‘By using the reel? (リールの釣竿を使って?)’
- (124) E: un. riiru ba tsukoo-te.
 yes. reel Acc using-with
 ‘Yeah. Using the reel. (うん、リールを使って。)’

C.2 ペチャ (めんこ)

付録 D

構文解析器 EARLEY における文法の書き方の制限

Jerry Morgan specifies how to write grammars on his parser EARLEY, as quoted from his writing, as follows: The software is designed for use with context-free grammars.

III. Earley に搭載する文法の性質: パーサー earley では文脈自由文法を使う。文脈自由文法は 1) 文脈自由規則と 2) 根範疇特定とからなる集合である。文脈自由規則は $A \rightarrow Y \dots$ 「矢印「 \rightarrow 」があり、その左にひとつの記号、右にひとつ以上の記号がある」型を取る。1 行 (行末は「リターン」である) に 1 規則である。根記号は文法の初期記号で、言語学の「文」範疇と考えてよい。根範疇特定は「 X 」を初期記号とする」という型 *initial symbol*: X を取る。初期記号は、文脈自由規則の少なくともどれかひとつの矢印の左になければならない。「(\downarrow 「) \downarrow 「 , 」などの省略記号は規則中に使えない。

Context-free grammars: A context-free grammar can be informally described as a set of context-free rules and a root category specification.

Context-free rules: A context-free rule has the following form:

$$A \rightarrow Y \dots$$

That is, one symbol on the left, an arrow (dash followed by right angle bracket) in the middle and one or more symbols on the right. In a grammar file, there can be no more than one rule per line.

The root symbol: One category must be specified as the 'root' or 'initial' symbol of the grammar; intuitively it is the category that counts as the 'sentence' symbol of the grammar. Traditionally, linguists have used S as the initial symbol. But any symbol is acceptable, as long as it appears left of the arrow in some rule of the grammar. The root symbol is specified as in the grammar by including in the

grammar a statement of the following form:

initial symbol : X

where X is the category to be used as the initial symbol. This line can appear anywhere in the file; first, last, or middle. If the grammar contains no initial symbol statement, an error message will be produced.

Comments: Between grammar writing sessions, it's easy to forget why you built the rules the way you did. So it's often useful to include explanatory comments in your grammar file, to describe the intent behind your rules. You can include comments in your grammar file by starting the comment line with a % (percent sign) at the very beginning of the line, like this:

% this is a comment line

Every line in your grammar file that begins with a

Restrictions: There are some common abbreviatory punctuations used to represent sets of context-free rules. These abbreviations cannot be used with the earley program. Some examples of unacceptable abbreviations:

Commas to abbreviate alternative right-hand sides:

$N \rightarrow \textit{cat}, \textit{dog}, \textit{elephant}$

This abbreviates $N \rightarrow \textit{cat}$, $N \rightarrow \textit{dog}$, and $N \rightarrow \textit{elephant}$.

Vertical bars used for the same purpose:

$N \rightarrow \textit{cat} | \textit{dog} | \textit{elephant}$

Parentheses used to indicate optional elements:

$NP \rightarrow \textit{Det} (\textit{Adj}) N$

This abbreviates $NP \rightarrow \textit{Det} N$ and $NP \rightarrow \textit{Det Adj} N$.

Curly brackets used to abbreviate alternatives:

$N \rightarrow \textit{cat}, \textit{dog}, \textit{elephant}$

Kleene *, Kleene +:

$NP \rightarrow NP + \textit{Conj} NP$

This abbreviates $NP \rightarrow NP \textit{Conj} NP$, $NP \rightarrow NP NP \textit{Conj} NP$, and so on.

Do not use these abbreviations in your grammar file.

付録 E

試験

E.1 章テスト No. 1, 出題範囲:「初めに」から第 1 章まで

得点: [_____/100]

学籍番号: _____ 名前: _____

「初めに」から第 1 章までをもう一度、よく読み、今までの宿題の解答をよく考えて、内容をしっかり理解してから、問題を解くと、比較的楽に解けます。この科目を履修している友人や同じグループの人と、この問題の解答を大いに議論しましょう。ただし、自分の答えは、自分の力で書いてください。他の人の答えを写してはいけません。他の人の答えを写した場合は、盗作となり、点はゼロです。締め切りは、1 週間後の授業の最初です。授業が始まる前に提出してください。Have fun!

[問題 1] [35 点] 語列 (125) に関して佐賀西部方言の文法 # 1 (図 1.17 に与えられたもの) の演繹試験をなさい。

(125) kodon naku no.
child cry[Nonpast] Nom

なお、佐賀の地域の人(佐賀西部方言母語話者)に自分で聞いて、この語列に関する母語話者の判断を収集すること。だが、母語話者に、この語列はどんな意味を持っているか聞いても、安定した母語話者の判断が得られないかもしれない。そのような場合には、佐賀西部方言母語話者に語列 (126) が文法的に正しい文かどうか尋ねよう。

(126) kodon naku no to desu.
child cry[Nonpast] Nom Comp[*fin*] is[Nonpast]

語列 (126) が文法的に正しいかどうかはここには記していない。もし語列 (125) が文法的に正しい文であれば、文法的に正しい文 (11) 'kodon no naku' が、(14) (= (17)) 'kodon no naku to desu' のように、'... to desu' 'it is that ...' の直前に現れることができるように、同語列 (125) も '... to desu' 'it is that ...' の直前に現れることができる。この診断テストによって、佐賀西部方言母語話者の語列 'kodon naku no' に関する判断を間接的に知ることができる。

[解答]:

- 結論 [10 点]:

- 予測 [15 点]:

- 現象 [10 点]:

[問題2] [65 点] 2-a) [35 点] 佐賀西部方言の母語話者の発話を、担当教員の指示するインターネットのアドレスから聞きます。発話はひとつの文だけから成ります。他の母語話者は、この発話の意味は、if the child goes to bed, the agemaki will cry であると言います。(1) まず、この発話の音をローマ字で(1)の欄に書いて下さい。(2) 次に、自分が(1)に解答した語列に関して、佐賀西部方言の文法#1(図1.17に与えられたもの)の演繹試験をして下さい。この解答は(2)の欄に書いて下さい。

[解答]:

(1) [10 点]

(2) [25 点] 語列(1)に関する佐賀西部方言の文法#1の演繹試験:

- 結論 [5 点]:

- 予測 [15 点]:

- 現象 [5 点]:

2 - b) [30 点] (3) まず、問題 2 - a で解答した語列 (1) に関して、正しい予測を産むような佐賀西部方言の文法 1. 1 を創って下さい。できるだけ佐賀西部方言の文法 # 1 (図 1.17 に与えられたもの) を活かして、例えば、佐賀西部方言の文法 # 1 (図 1.17) にいくつかの規則を加えて、そのような文法を作ってください。解答は (3) の欄に書いて下さい。(4) 次に、佐賀西部方言の文法 1. 1 が語列 (1) に関してどのような予測を産むかを (4) の欄に書いて下さい。ここでは予測だけでいいです。

[解答]:

(3) [15 点] 佐賀西部方言の文法 # 1. 1 中の新しい規則、つまり、佐賀西部方言の文法 # 1 に加えた新しい規則:

(4) [15 点] 語列 (1) に関する佐賀西部方言の文法 # 1. 1 の予測:

E.2 章テスト No. 2, 出題範囲 : 「初めに」から第 2 章まで

得点: [_____/100]

学籍番号 : _____ 名前 : _____

この科目を履修している人や同じグループの人と、この問題の解答を大いに議論しましょう。ただし、自分の答案は、自分の力で書いてください。他の人の答案を写してはいけません。他の人の答案を写した場合は、盗作となり、点はゼロです。締め切りは、1 週間後の授業の最初です。授業が始まる前に提出してください。Have fun!

[問題] この問題で、標準語「欲しい」のような特別な種類の形容詞について考える。このような特殊な形容詞であっても形容詞は対格句と生起しないと書かれている日本語の教科書が多いが、実際は、著者は、人々が「僕はビールを欲しいよ」と、主格句「ビールが」ではなく対格句「ビールを」を使うのをよく聞く。これは佐賀西部方言でも当てはまる。以下の問題の A)、B)、C)、D) は関連問題で、問題 A) で文法を発展させ、問題 C) でさらに文法を発展させる。

問題 A) [25 点] 佐賀西部方言の母語話者の発話を、担当教員の指示するインターネットのアドレスから聞こう。発話はひとつの文だけから成る。佐賀西部方言の母語話者はこの発話が I want jackknife clams を意味するという。^{*1} ここで日本語の「俺(おれ)」は佐賀西部方言では「oi」である。1) まず、この発話の音をローマ字で(1)の欄に書こう。2) 次に、(1)に解答した語列に関して、佐賀西部方言の文法 # 2 (図 2.1 に与えられたもの)の演繹試験をしよう。この解答は(2)の欄に書く。

[解答]:

(1)

(2) 佐賀西部方言の文法 # 2 の(1)中で解答した語列に関する演繹試験:

- 結論:
- 予測:

^{*1} 母語話者はこの語列は (You/he/she/they) want(s) my jackknife clams とも解釈されるという。このことはこの問題では考慮しない。

- 現象:

問題 B) [25 点] 3) 文 (127a) と語列 (127b) とで対比されるように、たいていの形容詞は対格句とは生起せず、主格句とのみ生起する。

(127) a. *agemaki no umaka.* [= *umai*]
 clam Nom good [Nonpast] [stndrd Jpns]
 ‘The clam is good.’

b. **kodon no agemaki ba umaka.* [= *umai*]
 child Nom clam Acc good [Nonpast] [stndrd Jpns]

文 (127a) と語列 (127b) のような普通の形容詞に関する現象を正しく予測するために、以下の規則を佐賀西部方言の文法 # 2 (図 2.1 に与えられたもの) に加えたという。

- VI → *umaka*

つまり、形容詞/*umaka*/を自動詞 (VI) と考えたわけである。ここで、さらに、問題 A) の (1) で答えた語列を正しく予測するような新しい文法 # 2.2 を創ろうと思う。上の規則を加えた佐賀西部方言の文法 # 2 をできるだけ活かして、例えば、これにいくつかの規則を加えて、そのような文法を作ること。加える規則を (3) の欄に書く。4) 次に、問題 A) の (1) で答えた語列に関して、新しい文法 # 2.2 がどんな予測を産むか、その予測を書こう。解答を (4) の欄に書く。

[解答]:

(3) 文法 # 2.2 は、文法 # 2 (図 2.1) に以下の規則を加えたものである:

-
-
-
- VI → *umaka*
- N → *oi*

(4) 文法 # 2.2 の (1) に関する予測:

問題 c) [25 点] 担当教員の指示するインターネットのアドレスから佐賀西部方言の母語話者の発話をもうひとつ聞こう。発話はひとつの文だけから成る。佐賀西部方言の母語話者はこの発話も I want jackknife clams を意味するという。^{*2} 5) まず、この発話の音をローマ字で(5)の欄に書こう。6) 次に、(5)に解答した語列に関して、佐賀西部方言の文法# 2.2の演繹試験をしよう。この解答は(6)の欄に書く。

[解答]:

(5)

(6) (5)で解答した語列に関する佐賀西部方言の文法# 2.2の予測:

- 結論:
- 予測:

- 現象:

問題 D) [25 点] 7) (5)に解答した語列を正しく予測するような新しい文法 2.3 を創ろう。ただし、できるだけ佐賀西部方言の文法# 2.2(この章テストの問題 B で創った文法)を活かして、例えば、佐賀西部方言の文法# 2.2 にいくつかの規則を加えて、そのような文法を作ること。加える規則を(7)の欄に書く。8) 次に、(5)に解答した語列に関して、新しい文法# 2.3 がどんな予測を産むか、その予測を書こう。解答を(8)の欄に書く。

[解答]:

^{*2} 母語話者はこの語列も (You/he/she/they) want(s) my jackknife clams とも解釈されるという。ここでも、このことはこの問題では考慮しない。

(7) 文法 # 2.3 は、文法 # 2.2 に以下の規則を加えたものである:

-
-
-
-

(8) 文法 # 2.3 の (5) に解答した語列に関する予測:

E.3 章テスト No. 3, 出題範囲 : 「初めに」から第3章まで

得点: [_____/100]

学籍番号: _____ 名前: _____

この科目を履修している人や同じグループの人と、この問題の解答を大いに議論しよう。ただし、自分の答えは、自分の力で書いてください。他の人の答えを写してはいけません。他の人の答えを写した場合は、盗作となり、点はゼロです。締め切りは、1週間後の授業の最初です。授業が始まる前に提出してください。Have fun!

問題 I [6点×5; 10点×2] <問題 I は、動詞の辞書形からその動詞の可能な形態種を算出する問題である。日本語標準語や佐賀西部方言を習得し始めた外国人になったつもりでやろう>。例(128)中のそれぞれを標準語の動詞の現在形だと仮定する。動詞の形態種を算出する規則「How to Figure out the Morphological Type of verb from its Dictionary Form」だけを使って、それぞれの動詞がどの形態種に属するか、可能な限り、算出しなさい。そして、それぞれの否定形と、対応する佐賀西部方言の現在形とを書きなさい。答えは例に従って書く。加えて、(128c)「かうなる」と(128e)「まぎれる」とについては、算出の過程を書いてください。

(128) a. 例1) はばける /habakeru/

形態種: [i) 子音終末語幹動詞、あるいは、ii) 母音終末語幹動詞]

否定形: [i) の場合: 「はばけらない」、ii) の場合: 「はばけない」]

佐賀西部方言の形態: [i) の場合: 「はばけー」、ii) の場合: 「はばくっ」]

b. 例2) する /suru/

形態種: [i) 強変化動詞: 意味 'do'、ii) 子音終末語幹動詞]

否定形: [i) の場合: 「しない」、ii) の場合: 「すらない」]

佐賀西部方言の形態: [i) の場合: 「すっ」、ii) の場合: 「すー」]

c. かうなる /kaunaru/

形態種: [_____]

否定形: [_____]

佐賀西部方言の形態: [_____]

考えのプロセス:

- d. しる /shiru/
 形態種： []
 否定形： []
 佐賀西部方言の形態： []
- e. まぎれる /magireru/
 形態種： []
 否定形： []
 佐賀西部方言の形態： []
 考えのプロセス：
- f. はらう /harau/
 形態種： []
 否定形： []
 佐賀西部方言の形態： []
- g. ぐす /gusu/
 形態種： []
 否定形： []
 佐賀西部方言の形態： []

問題 II 担当教員の指示するインターネットのアドレス、<http://www.isc.saga-u.ac.jp/h-koga/index.html> から、母語話者 aさんと bさんの佐賀西部方言の会話（129）を聞いてください。（1）[8点; 7点] この会話を、[]をローマ字で埋めて、完成させよう。

- (129) a. 雨の 多か ばってん、エアコンば 除湿にした
 ‘雨が 多い けど、 エアコンを 除湿にした’
 けん、[A]]
 ‘から、[.....]’
- b. [B]]ら、よかね。
 ‘[.....]ら、いいね。’

佐賀西部方言の母語話者は最初の文は、although we have a lot of rain, the laundry will get dry since I set the de-humidifier of the air conditioner on を意味し、次の文は、It

would be good if the laundry got dry を意味するという。どちらの空欄もひとつの節だけから成る。

(2) [15点] (1) で解答したふたつの語列、空欄に入れた文・節、を正しく予測するような新しい文法 3.1 を創ろう。ただし、できるだけ佐賀西部方言の文法 # 3 (図 3.2、図 3.2 において提案された文法) を活かして、例えば、佐賀西部方言の文法 # 3 にいくつかの規則を加えて、そのような文法を作ること。加える規則を (2) の欄に書く。ヒント: 関連する動詞がどの形態種に属するかが鍵となる。

(3) [10点; 10点] 次に、(1) に解答したふたつの語列、空欄に入れた文節に関して、新しい文法 # 3.1 がどんな予測を産むか、その予測を書こう。解答を (3) の欄に書く。

[解答]:

(2) 文法 # 3 . 1 は、文法 # 3 に以下の規則を加えたものである:

-
-
-
-
-

(3) 文法 # 3 . 1 の (1) で解答したふたつの語列、空欄に入れた文節に関する予測:
空欄 A) の文・節について

空欄 B) の文・節について